みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

空間概念としての客家：「客家の故郷」建設活動をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): Hakka	space	spatializing	market economy	simulacre 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003851

国立民族学博物館研究報告37(2): 199-244 (2013)

空間概念としての客家
──「客家の故郷」建設活動をめぐって──

河　合　洋　尚*

The Hakka as Spatial Concept: The Construction of the "Homeland of Hakka" in the Border Districts of Guangdong, Fujian, and Jiangxi Provinces

Hironao Kawai

中国広東省・福建省・江西省の境界部に位置する山岳地帯は，世界中に散住する客家の故郷であり，そこの漢族住民のほとんどが客家で占められていると，一般的に考えられている。ところが，この「客家の故郷」における 1980 年代以前のデーターを整理しなおしてみると，この地の漢族住民は必ずしも客家として記述されておらず，また，客家としての自己意識をもたない住民も少なくはなかった。この事実を踏まえ，本稿では，特に 1980 年代以降の一連の空間政策により「客家の故郷」をめぐるイメージが形成され，ここの漢族住民が客家とみなされていったプロセスを明らかにする。

The border district of Guangdong, Fujian, and Jiangxi province is generally considered to be the "homeland of the Hakka" and the Han inhabitants of this district are normally considered to be the Hakka. In fact, however, the inhabitants are not always described as Hakka in the documents of 1980s and after and they have recieved their particular identity as the Hakka only recently. This paper aims to make clear the process by which the space policy since the 1980s has fabricated the image of the "homeland of the Hakka" and the Hakka ethnicity.

*国立民族学博物館機関研究員

Key Words：Hakka, space, spatializing, market economy, simulacre
キーワード：客家，空間，空間化，市場経済，シミュラークル

1　問題提起
2　1980 年代以前の交界区における客家の表象
2.1　交界区と客家をめぐる概況説明
2.2　客家の分布をめぐる諸記録
2.3　交界区における客家アイデンティティ
3　交界区における客家空間の生産と拡張
3.1　粤東における客家ブランドへの気づき
3.2　閩西における客家空間の生産と拡張
3.3　贛南における客家の利用と空間化
4　シミュラークルとしての客家空間
5　結語

1　問題提起

中国広東省，福建省，江西省の省境（以下，交界区と略称する）は，客家と呼ばれる人々の居住地として知られている。一般的な見解によると，客家はかつて中原[1]に住む漢人であったが，戦乱を避けるため，唐末から数百年の時をかけて交界区まで南下した。彼らは，先住の諸民族より遅れてこの地にやってきた「客」(外来者) であったため，客家と呼ばれているのだという。さらに，客家は，交界区から中国西南部，香港，台湾，東南アジアの華僑社会など世界各地に移住しており，その総人口は 5,000 万人とも 1 億人とも言われている。1990 年代には，鄧小平，李登輝，リー・クワンユーといった著名人を輩出したことで，客家は，一躍脚光を浴びるようになり，ユダヤ人のような世界を股にかける有能なディアスポラとして描かれるようになった（高木 1991; 根津 1994)。他方で，世界の客家の出身地として交界区が注目されるようになり，「交界区の出身者といえば客家である」という見解は，今や中国の一般書や博物館展示の前提であり，社会的な「常識」ともなっている。それゆえ，筆者は，2003 年 8 月に初めて交界区を訪れてからしばらくは，こうした「常識」を鵜呑みにし，疑うことすらなかった。

ところが，2008 年 3 月より交界区に長期で住み込み，交界区の内部および周辺地区でフィールドワークを進めるにつれ[2]，筆者は，以上の「常識」に次第に疑問を抱くようになった。第一に，交界区の住民は，同じエスニシティとして形容していいのか疑うほど，言語・文化のうえで多様であった。また，第二に，1980 年代までに「客家」と呼ばれていた集団は交界区の中でも一部にすぎず，多くの住民は，客家としての自己意識を持っていなかった。この事実は，交界区の漢族住民をすぐさま客家と結

び付ける現代人の認識とは，かけ離れたものである。しかし，それならば，なぜ彼ら交界区の住民は，現在，客家という名で一括りにされているのだろうか。筆者は，交界区とその周辺地域でフィールドワークを進めれば進めるほど，客家とは誰であるのかが分からなくなっていった。

本稿は，こうした問題意識を出発点として，言語・文化・アイデンティティのうえで偏差が激しい交界区の人々が，なぜ客家の概念でひとまとめにされているのかを論じるものである。特に，1980 年代末から交界区で起こった「客家の故郷」建設の動向に着目し，この活動以降，客家の概念範疇が交界区の空間範疇と重なっていったプロセスを明らかにすることにしたい。そのために本稿は，2 つの事実を例証することから始める。まず，次節では，1980 年代以前の交界区の記録を紐解き，「客家」が交界区における一部の集団にすぎなかったことを指摘する。具体的には，宣教師，海外政府機関，地方誌，華僑や学者が残した記録などを参照にすることで，交界区の住民＝客家という図式がまだ成立していなかった点を指摘する。次に，第 3 節では，1980 年代以降の政治経済的な変化により，客家をめぐる位置づけが変化し，交界区＝客家の図式が次第に形成されていったプロセスを示す。特にこの節では，1980 年代末に始まる地方政府主体の空間政策により，客家をめぐる現在の「常識」がつくりあげられていった様相が明らかにされるであろう。最後に，第 4 節では，客家と空間をめぐる関係性について理論的な考察をおこない，結論部につなげる。

2　1980 年代以前の交界区における客家の表象

この節では，1980 年代以前の交界区で，客家がいかに語られていたのかを論じる。まずは，交界区を客家の居住地とする現在の認識について概観し，続いて，そうした認識が 1980 年代以前の交界区においては，必ずしも「常識」でなかった事実を検討する。

2.1　交界区と客家をめぐる概況説明

世界中に分布する客家の「故郷」とみなされる交界区は，冒頭でも論じたように，広東省，福建省，江西省の省境に位置する。図 1 にみるように，この一帯には，広東省梅州市，福建省龍岩市，三明市，江西省贛州市といった行政区が存在する。これらの行政区は互いに隣接しており，ともに山岳の交通の便が良くない地勢にある。世界の客家たちが「故郷」としている地域は，概ねこれらの行政区の内部にある。

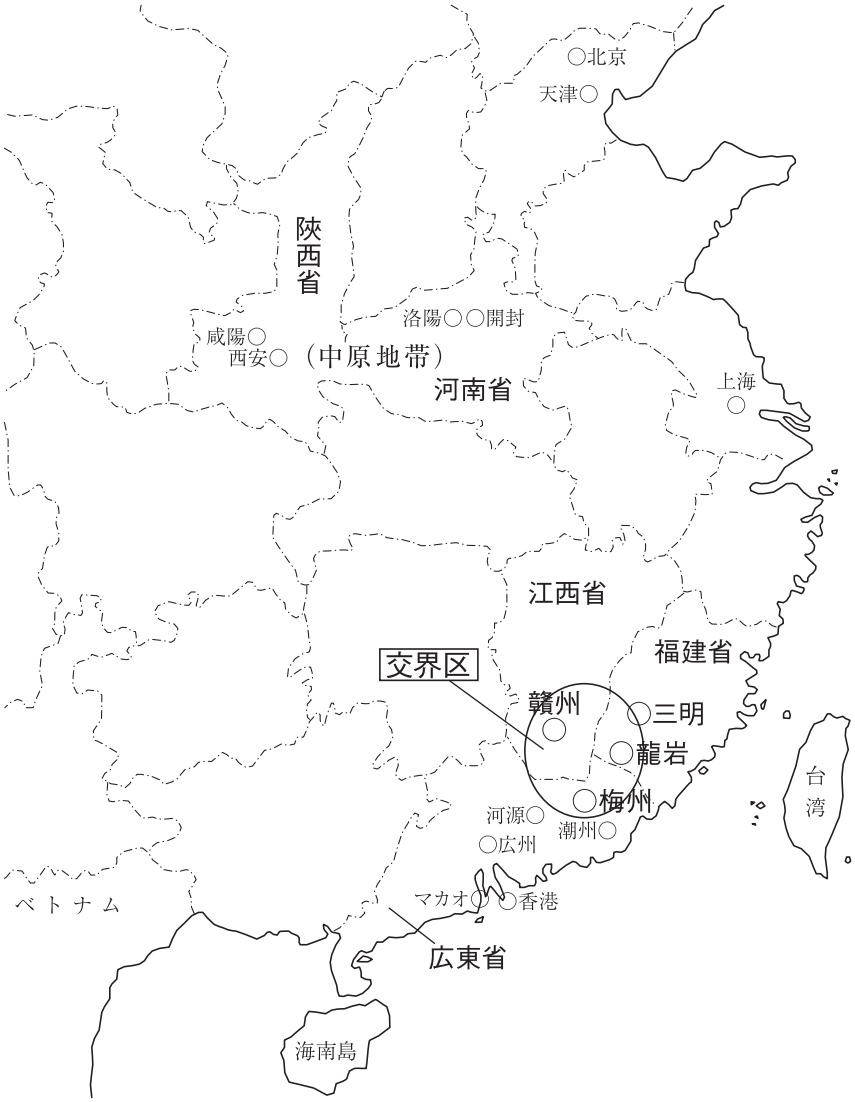

図 1　中国における交界区の位置

では，客家の居住地である彼らの「故郷」は，具体的にはどこであると考えられているのであろうか。梅州市，龍岩市，三明市，赣州市の各政府ホームページ，および客家の概説書を整理すると, 多少の差異こそあれ, その地理的範囲はおおよそ一致している。各政府のホームページ(2011 年 12 月アクセス), および 2 冊の概説書(『客家風華』（胡・莫・董・張 1997),『客家人与客家文化』（丘 2011））の記載内容は以下の通り

図 2　粤東地図

である。

まず，梅州市については，ここが客家の中心地であり，実に 99 パーセント以上の住民が客家であると書かれている。梅州市には，1 つの区（梅江区）と 7 つの県（梅県，蕉嶺，平遠，興寧[3]，五華，大埔，豊順）があるが，豊順を除くすべての区や県は，市外からの移住や婚入を除き，ほぼ 100 パーセントの住民が客家であるとされている。ただし，豊順だけは，湯南鎮，留隍鎮，東留鎮などに非客家語（潮州語）の話者がいるため，客家住民だけで占められると表記することに慎重である。しかし，総体的に見れば，梅州市は，基本的には客家だけで占められる，「純粋」な客家地区としてみられていることが分かるであろう。本稿では以下，梅州市を粤東と称する。

次に，福建省の西部に位置する龍岩市と三明市については，現在の行政区分から見れば，ここの全住民が客家であると考えられているわけではない。龍岩市には 1 つの区（新羅区）と 6 つの県（永定，上杭，武平，長汀，連城，漳平）があるが，そのうち中西部の新羅区と漳平の住民は，基本的には閩南人であると考えられている。しかし，西部に位置するその他の 5 つの県は，基本的には客家で占められる「純粋な」客家居住地であるされている。他方，三明市は 2 つの区と 10 の県を抱えるが，2011 年 12 月の時点の政府公式ホームページで「純粋」な客家地区であると公表されていたのは，西部に位置する寧化だけであった。ただし，『客家人与客家文化』では，同じ

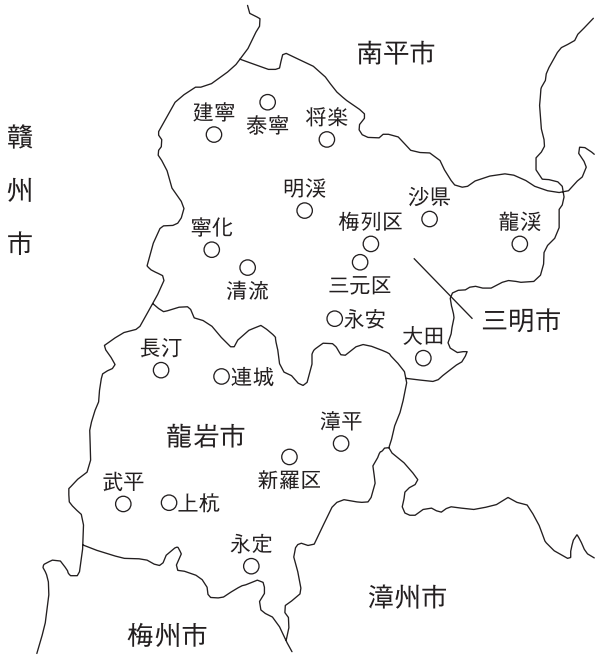

図 3　閩西地図

三明市西部に位置する明渓と清流が，『客家風華』では明渓と沙県が，ほぼ 100 パーセント客家で占められる県であると記載されている。いずれにせよ，福建省において客家地区は，龍岩市西部の 5 県（永定，上杭，武平，長汀，連城）と三明市西部の各県（寧化，清流，明渓あるいは沙県）である。そして，これらの行政区は，清代までの行政管轄機構であった汀州府[4] とほぼ合致している。本稿では，旧汀州府の行政範囲と合致する客家の居住地を，閩西と称する。

続いて，江西省の南部に位置する赣州市は，江西省で最大の面積を誇る行政市であり，現在，900 万人を超える人口を抱えている。赣州市には，3 つの区（章貢区，章江新区，赣州経済技術開発区）と 17 の県（赣県，南康，于都，会昌，信豊，安遠，尋烏，定南，龍南，全南，大余，崇義，上猶，寧都，興国，石城，瑞金）があるが，そのうち 17 の県は，ほぼ 100 パーセントの客家が住む「純粋」客家県として描かれている。都市部に位置する諸区は，西南官話を話す別の集団であるので，ここの住民は必ずしも客家に含まれない。また，公的なデーターとは別に，信豊も西南官話の話者が多いので，研究者によっては，ここを「純粋」な客家地区とみなさないことがある。しかし，それ以外の県では，婚入してきた女性を除き，現地で生まれ育った住民

図 4　赣南地図

は基本的には客家とみなされる。本稿では，赣州市を赣南と称し，交界区を粤東，閩西，赣南の 3 地域により構成される一帯と定義する。

以上のデーターより，粤東，閩西，赣南より構成される交界区は，若干の例外を除けば，ほぼ 100 パーセントが客家によって占められる，「純粋」な客家地区であると表象されていることが分かるであろう。こうした見解は，微細な認識の差こそあれ，現地の政府や学術により共有されている公的な「常識」となっている。

しかし，ここで注意を払わねばならないのは，交界区の住民が同じ客家というカテゴリーによって括られているからといって，彼らの言語や文化にも共通性があるとは限らないということである。客家内部の差異については，瀬川昌久（1993）が香港や中国東南沿岸部の事例からすでに述べているが，同様のことは，交界区の内部だけに限っても該当するものである。例えば，言語面を挙げると，粤東の客家語（以下，粤東の梅州市で話されている客家語を粤東方言と称す）は，その周辺の諸県では通用するが，閩西北部の寧化，連城，あるいは赣南北部の于都，寧都，興国の客家語と意思疎通を図ることができない。そうかと思えば，赣南東部の一部の客家語は，その周囲の赣語とコミュニケーションをとることができる。文化面においても，粤東の客家料

理は，塩分が多く脂っこいが，辛くはない。だが，贛南の客家料理は，唐辛子の辛さがきいた料理が多い。同じ客家語，同じ客家文化といっても，その内部にはかなりの差異があり，同じエスニック集団で括れるほどの，ゆるやかな統一性があるようにも思えない。筆者が別稿で述べたように，客家文化の特色とされているものは，周囲の他漢族集団にもたいてい存在するし，日本にすら存在することもある（河合 2010）。

このようにしてみると，客家は，同じ交界区にいる同質的なエスニシティであるかのように見みえがちだが，実際には言語や文化が異なるいくつもの集団が存在すると言った方が適切であるかもしれない。1980 年代以前の交界区をめぐる歴史文献，および現地住民のアイデンティティを調べると，こうした仮説は一層確たるものとなる。

2.2　客家の分布をめぐる諸記録

客家をめぐる記録は，すでに 17 世紀に存在する。そのうち最も早く「客家」の二文字が記録されたのは康熙 26 年（1678）の『永安県次志』であり，続いて 19 世紀初頭には，徐旭曾なる人物によって「客民」にまつわる説明がなされた。また，19 世紀半ばには，宣教師エルネスト・アイテルによって，客家（Hakka）の存在についての言及がなされた。これらの記録は，交界区ではなく，広東省の中東部に位置する河源市，恵州の一帯でなされたものである。しかし，1898 年には粤東の『嘉応州志』で初めて客家の文字が記録され，また，この頃までには西洋の宣教師も粤東が客家の居住区であると考えていたようである。19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて欧米の宣教師は，客家がかつて中原の民であり，優秀な漢族の末裔であることを主張するようになっている（飯島 2007: 64–65; Kawai 2011: 52）。

しかしながら，19 世紀までの段階で史料に掲載されていた「客家」が，果たして我々が現在思い浮かべるそれと同じであるのかどうかについては，これまで検討されることが少なかった。多くの研究者は，同じ「客」という文字を見て，また，中原から南下した漢族であるという記載に満足して，当時の「客家」がどのような概念で使われていたのか，あまり注意を払ってこなかったのである。確かに，19 世紀の宣教師による諸記録から，当時の「客家」認識を知ることは容易ではない。ただし，アメリカの宣教師であるダイヤー・ボールが辞典形式で 1893 年に出版した『Thing Chinese』の記載から，当時の宣教師による「客家」認識の一端を垣間見ることができる。ダイヤー・ボールは，客家が中原にルーツをもつ漢族であることを説明した後，その分布について以下のように述べている。

「彼ら［客家］は，広東省における第三の［本地や福佬に続く］住民であるが，広東省にのみ居住しているわけではない。彼らは，江西省，福建省，浙江省，台湾など他の地域でも見受けられる。江西省の大部分は客家であるとも言われており，その省都である南昌市で話される言葉も客家語であると言われる」［括弧は筆者補足］（Dyer-Ball 1893: 210）。

ダイヤー・ボールは，さらに粤東が客家の中心地であり，ここのほとんど全ての住民が客家であると紹介している。粤東が「純粋」な客家地区であるという認識は，19世紀末の段階ですでに認識されていたといえるだろう。だが，ダイヤー・ボールの記録は，少なくとも2つの点で今日の「常識」と異なっていることに，ここで注意を払わねばならない。第一に，ダイヤー・ボールは，粤東を「純粋な」客家地域としている反面，閩西と贛南もそうであるとは述べていない。彼は，客家が福建省や江西省にいることも認めているが，江西省のほぼ全域を客家の居住地としている。言うまでもないが，今日の「常識」からすれば，江西省北部で客家は少数派であるし[5]，特に南昌市のマジョリティは贛語系の漢族である。第二に，浙江省は，一般的に客家の居住区がなく，浙江方言を話す漢族やショオ族などが居住すると考えられている。1912年に浙江省を旅した東亜同文書院（1912）の学生は浙江省に「客家」がいることを報告しているが，ここでは，ショオ族と客家が混同されていた[6]。この記録を考慮に入れると，ダイヤー・ボールが記した浙江省の「客家」が，ショオ族を指していた可能性は十分にある。ダイヤー・ボールの認識が，当時の宣教師たちの認識を代表していたかどうかは分からないが，客家をめぐる他の記載が宣教師の記録と一致している点を考慮すると[7]，彼が客家の事典項目を作成するにあたって先行の諸記録を参照していた可能性は高い。

当時の客家認識が今日の「常識」と乖離している点については，欧米の宣教師だけでなく，日本人による記録にも該当する。19世紀末に台湾を統治してから，日本の統治者や学者は，現地で「客家」と呼ばれる人々に遭遇するようになった。さらに，「客家」が台湾だけでなく中国東南部にも分布することを知った日本人は，1920年代になるまで，「客家」にまつわる若干の記録を残している。ただし，その記録内容は時として今日的な「常識」から乖離することがあり，例えば「客家」は原住民や水上居民と混同されることもあった。こうした誤解に対して，日本で修正のメスが入れられるようになったのが1930年であり，この年に山口県造（1930）と彭阿木（1930a, 1930b）が各々の論文で，客家が中原から南下した正当な漢族であることを主張した（河合2011）。しかし，粤東出身者を自称する彭阿木は，粤東を「純粋」な客家地区とみなしてはいたが，閩西や贛南が客家語の使われる地区であるとは述べていない。

表 1　羅香林による交界区の客家比率（羅香林 1992: 125–129）

レベル	粤東	閩西	贛南
純客住県	梅県，蕉嶺，平遠，五華，大埔，豊順，興寧	永定，上杭，武平，長汀，寧化	信豊，安遠，尋烏，定南，龍南，全南，大余，崇義，上猶
一級客住県	—	—	—
二級客住県	—	連城，新羅，清流，明渓	贛県，南康，于都，会昌，安遠，寧都，興国，石城，瑞金

彭が客家語の使用範囲とみなしたのは，あくまで粤東方言と意思疎通のとれる範囲内であった（彭阿木 1930a: 124–125）。同様の見解は，1932 年に日本外務省情報部から出版された『広東客家民族の研究』にも引き継がれている。この本でもまた，粤東方言およびそれと意思疎通を図ることのできる地区が，「ほとんどが客家で占められる」地区であるとされている（在広東総領事館編 1932: 9–10）[8]。

交界区の絶対的多数の住民を客家と結びつけない傾向は，外国の観察者に限定されるものではない。明代，清代に編纂された『汀州府志』や『贛州府志』を紐解いてみても，客家の記載はみあたらず，客家の記載が 1920 年代までに出現したのは，管見の限りにおいて粤東のみである[9]。さらに，中国客家学の開拓者であり，客家をめぐる今日的な「常識」をつくったと目される羅香林ですら，交界区の全てを「純粋」な客家地区とみなしていたわけではなかった。羅香林は，客家の占める割合がほぼ 100 パーセントである県を「純客住県」，約 80 パーセントである県を「一級客住県」，約 30 パーセントである県を「二級客住県」と定義したが，交界区の全てが「純客住県」として描かれていたわけではなかったことは，表 1 を見れば一目瞭然である（羅香林 1992 [1933]）。

以上のように，羅香林が挙げた交界区の 34 の県（区）のうち，「純客住県」として挙げられたのは 21 の県で，それ以外の 13 の県は，客家人口が約 30 パーセントの地区であると考えられている。割合からすれば，交界区の約 38 パーセントは，むしろ客家の割合が少ない県であったということになる。言うまでもなく，この数値は「交界区の住民といえば客家である」という現在の「常識」とは一致しない。

羅香林が客家の少ない地区とみなした諸県を検討すると，そこには一定の規則性があることが分かる。まず，羅香林は，前述のダイヤー・ボールや彭阿木と同様，粤東を客家の中心地とみなしている。彼の代表作である『客家研究導論』で述べられている客家の民俗を見ても，彼が粤東の住民をイメージして客家を論じていることは疑いの余地がない（羅香林 1992 [1933]）。これは，羅香林自身が粤東の出身者であることとも関係しているであろう。彼が表 1 で述べている「純客住県」もまた，粤東，およ

び粵東と言語的に意思疎通をとりやすい周辺地区に偏っている。したがって，粵東方言と距離のある贛南や閩西の北部は，必ずしも「純粋」な客家地区として数えられていない。次に，羅香林は，粵東と言語的にも文化的にも異なる寧化と長汀を「純粋」な客家地区としている。これは，羅香林がこの 2 つの県を，中原からの移住ルートの中継点に位置づけたことに関係していると考えられる。よく知られているように，羅香林は，族譜の検証を通して中原からの南下ルートを示したが，その移住ルートは概ね中原→贛南→閩西（長汀が首都）→粵東というものであった。特に，粵東の多くの住民は，族譜のうえで閩西，なかでも寧化の石壁村を通っていたので，そこを客家のルーツの 1 つと位置づけていた[10]。

南昌大学の黄志繁が指摘しているように，羅香林の「客家」認識は，族譜など文字資料だけでなく，彼の父親やその友人からの口頭の説明にも依存していた（黄志繁 2007: 57–58）。したがって，羅香林が誰を客家としていたかは，粵東およびその周辺地区を中心とした，いわば粵東中心主義の視点であったと考えられる。だから，同じ交界区であっても，粵東から言語的・文化的に遠い地区は，「客家」の範疇に入ってこなかったのであろう。

当時認識されていた「客家」が，粵東とつながりのある範囲に収まる傾向が強かった点については，香港と東南アジアにおける関連の資料からも明らかである。例を挙げると，香港の客家たちの総本山ともいえる香港崇正総会が 1921 年に出版した『崇正同人系譜』は，羅香林と同じく，中原→贛南→閩西→粵東の移住ルートを描きだしている。だが，その反面，科挙に合格した歴代の客家を羅列する章においては，粵東をはじめ広東各地の出身者が記載されているだけで，閩西や贛南の出身者は 1 人たりともいない。湖南省や四川省の出身者ですら少数ながら掲載されているのに，閩西や贛南の科挙合格者が「客家著名人」の系譜に入れられていないのは明らかに不自然である。他方で，インドネシアの華人社会においても，客家は粵東の出身者を基準に語られていたようである。1956 年にジャカルタ天声日報社から出版された『客族文献砕金』という書籍には「客族」についての説明があるが，そこでも粵東が「純粋」な客家の居住地であると書いているだけで，閩西，贛南への言及は一切ない[11]（何吟 1956）。

以上，筆者は，19 世紀末から 1950 年代までの主要な文献をとりあげ，外部の観察者が交界区の住民をどのように描いていたかを考察した。もちろん上記では，1980 年代以前の全ての文字資料を検討したわけではないが，当時の交界区が必ずしも客家と等符号で結ばれていたわけでなかったことを示すには，十分であろう。交界区の住

民の絶対的多数が客家であるという言説は，少なくとも 1950 年代の時点において，誰もが共有していたわけではなかったのである。

2.3　交界区における客家アイデンティティ

1960 年代から 1980 年代にかけて，中国，台湾，および多くの中華圏では，政治的な要因により客家への研究や記録が中断された。他方，イギリス，アメリカ，日本の人類学者は，この時期に客家地区におけるフィールドワークをおこなったが，調査事情により，台湾や香港における調査研究がほとんどであった。それゆえ，この時期の交界区をめぐる記録は入手が困難になっている。しかし，1980 年代初頭の客家研究を概観すると，閩西と贛南が必ずしも客家の枠組みで捉えられていなかったことは，興味深い[12)]。

実際，文字資料という外的要因だけでなく，住民のアイデンティティという内的要因から見ても，1990 年代まで，交界区の住民は必ずしも客家と結び付けられてはいなかった。つまり，交界区の少なからぬ住民は，2, 30 年前まで自身を客家であるとはみなしていなかったのである。この傾向は，特に閩西と贛南で顕著であり，これらの地区では「客家とは別の集団であり自らは客家ではない」と考える住民すら存在していた。他方で，粤東では少なくとも 1920 年代から，民間においても「客家」としての自己認識が一部存在していた（夏遠鳴 2012: 58–59）。この事実は，なぜ粤東だけが文献のうえで「純粋」な客家地区とみなされがちであったのかを，説明しうるものである。

しかしながら，粤東のほとんどの住民が客家としての自己認識を持っていたかといえば，そうでもなかったようである。確かに 20 世紀前半の粤東では，自身が中原の血統を引く正統な漢族，すなわち客家であると主張する人々が社会運動を起こした過去がある（程美宝 2006）。この運動には，閩西や贛南は参加しておらず，独り粤東だけが客家意識を高めていった。ただし，この運動に参加した主体は，一部のエリート層であり，この出来事が粤東のあらゆる住民の客家意識を喚起したと考えるのは早計である（Kawai 2011: 57）。アメリカの人類学者ニコール・コンスタブルは，ある粤東出身の老人の話を取りあげ，1920 年代当時の粤東住民が，客家としての自己意識を必ずしも持っていなかった事実を指摘している（Constable 1996: 12）。

ただし，だからといって筆者は，戦前の粤東住民に客家アイデンティティが全くなかったと言いたいわけではない。宣教師であるチャールズ・レイが 1937 年にフラン

ス語で刊行した『*Conversation Chinoises*』には，当時の粵東住民の会話が記録されているが，彼らは，潮州人にまつわる話題になると，すぐさま「客人」としての自己を強調している。例えば，ある一節では，潮州劇と客家劇の対比をめぐる対話が展開されているが，そこでは「学佬音」を使う他者＝潮州人に対し，異なった言語を使う自己＝「客」としての身分が前面に押し出されている（Rey 1937: 344–345）。ここでは主に言語を基準とし，集団アイデンティティとしての線引きがなされている。

すなわち，戦前の粵東住民は，他集団との関係性において「客」としての自己アイデンティティを主張することがあった。ただし，筆者が話を伺った 70 歳以上の老人たちの話によると，彼らは幼い頃から「客」という表現を知っていたが，それを日常的に使うほどではなかったのだという。彼らの多くが口を揃えて言うには，客家という言葉を日頃から使うようになったのは，対外開放がなされた 1980 年代以降なのだそうだ。また，注意すべき点は，粵東住民が使ってきた「客家」の概念が，交界区の住民を指すのではなく，粵東方言を中心とする，より限定的な集団を指してきたということである。粵東出身であり著名な客家学者である房学嘉は，粵東で慣習的に呼んできた「客」とは，粵東方言で言う「哈」の意味であり，「学佬人」など異なる言語・文化を持つ集団に対し，自己のアイデンティティを示す概念であったと述べている（房学嘉 2009: 168）。つまり，粵東で言われてきた「客」または「哈」とは，交界区の住民を広く指す概念ではなく，あくまで粵東方言の使用者と言語的，文化的な近似性をもつアイデンティティ集団を指していたのである。

房のこの指摘は，現在の粵東住民の客家アイデンティティを知るうえでも貴重な示唆を含んでいる。なぜなら，粵東では近年，一方で客家＝交界区の住民が浸透しつつあるが，他方で「哈」としての「客家」概念も民間に残っているからである。2008 年より粵東で日常生活を送るなかで，筆者は，ここの住民が言う「客家」とは何を指しているのか注意深く観察したことがある。この観察から明らかになったのは，特に中高年者層の言う「客家」は，往々にして粵東住民を指していたことであった。筆者は，事あるごとに自分が客家だと言っていたある中年女性が，閩西南部の上杭人に出会った時，「あの人，閩西の出身なのに客家語を話すのよ。発音は変だけど会話は問題ない。あの人，客家だったのね」と語ったのを，今でも鮮明に覚えている。

実際，彼らが思い描く「客家」を聞いていくと，たいていが粵東住民か，あるいは粵東方言と意思疎通をとれる範囲に偏っていた。つまり，彼らの「客家」認識は，彭阿木や羅香林がそうであったように，粵東中心主義である。換言すると，彼ら粵東住民と言語や文化が類似している人々だけが「客家」の枠組みで捉えられ，そうでない

集団は「学佬人」「贛南人」などと差異化されるのである。筆者は，粤東出身のあるインフォーマントと一緒に贛南を旅したことがあったが，彼が言ったセリフもまた印象的であった。彼は「贛南の人々は客家ではない。だって言葉も料理もまるで違うではないか」と言い切ったのである。彼の主張する「客家」とは，明らかに言語的・文化的な共通性を認識する，同質的集団としてのそれである。

それでは，閩西や贛南の状況はどうだったのであろうか。現在，これらの地区でフィールドワークを進めると，多くは自身が客家であると「一応は」言う。また，彼らは客家の中心としての粤東の地位を認めており，粤東と並ぶ客家の中心地の 1 つであると語る傾向にある。したがって，現在の表面的な語りだけを信用すると，やはり交界区は「純粋」な客家の居住区なのだと納得させられるかもしれない。しかし，少なくとも 1990 年代まで，閩西と贛南の住民が必ずしも客家としての自己認識を抱いていたわけではないことは，いくつかの記録より明らかである。例えば，言語学者・呉文福は，1990 年代初頭の閩西住民のうち，寧化人の客家アイデンティティについて次のような記録を残している。

> 「1991 年 1 月 17 日，私はバスに乗って龍岩から永定に客家の調査に出かけた。向かいの席に 2 人の老夫婦と 2 人の若い女性，独りの子供がいて話をしていた。私はそれが客家語であることが完全に分かったので，どこの出身であるか尋ねたところ，寧化の人だという。そこで私は客家語で『あなた方も客家ですか』と聞くと，彼らは驚いて『何で私たちが客家なのですか。私が今から行く大埔の人を客家と言うのです』と答えたのである」（呉文福 1994: 28）。

このことは，学者により客家語と分類された言葉を話していても，寧化の住民に客家としての自己意識がなかったことを示している。このように，1990 年代初頭の段階では，全ての閩西住民が客家アイデンティティを抱いていなかったわけであるが，このことは贛南の状況にも該当する。呉文福は，贛南住民の客家認識についても，次のように述べている。

> 「1990 年 11 月 16 日，贛南師範大学の責任者である羅勇と李聯春が閩西を訪問した時，彼らは，贛南のほとんどの住民は自らが客家であることを認めず，客家といえば広東省や広東省との省境に住む『三南』（全南，龍南，定南）の人を指すと思われているのだ，と語った」（呉文福 1994: 28）。

贛南のうち，広東省よりの諸県の住民だけを客家とみなす住民の認識は，羅香林のそれと重なるところがある。すなわち，羅香林は，贛南の北部諸県を客家の少ない地区とみなしていたが，そこの住民もまた，自らを客家とはみなしておらず，客家とは

別の集団であると考えてきたのである。

この自己意識の所在を理解するためには，贛南に「本地人」と「客籍人」の区別がもともとあったことに触れておかねばならない。贛南住民は，今こそ同じ客家のカテゴリーで括られているが，もともと言語・文化・アイデンティティのうえで偏差があった。特に，客籍人は，粤東から移民してきた集団で，主に広東省に近い一帯に住んでいた。彼らは，かつては「棚民」「広佬」「懐遠人」などと呼ばれ，「客籍人」とも呼ばれていたが，羅香林が名づけるまで「客家」という自称もなかった（Leong 1997; 劉鎮発 2001: 94）。それに対し，「本地人」とは贛語系統の言語を話す土着人で，贛南の北部をはじめ，各地に分布していた。「本地人」は，「客籍人」とは異なる集団であると考えられており，両者は大きな械闘こそ起こさなかったが，小さな葛藤はしばしば生じた（劉紹鑫 1996）。

交界区の内部に互いに異なるアイデンティティ集団があった例は，贛南にとどまることはない。蔡驎は，閩西に「平地人」と「山地人」の区別があり，後者のみが「客家」であると現地で考えられていたと指摘している。蔡驎によれば，平地の住民にとっては山間部の住民が「客家」であり，その山間部の住民にとってはさらに山奥に住む住民が「客家」なのだという（蔡驎 2005: 308–309）。つまり，閩西において誰が「客家」であるかは，平地／山地の対比から相対的に生まれる。閩西の全ての住民が客家であるということにはならないのである。

以上の事例から明らかになることは，交界区ではかつて，ルーツ・言語・文化などに応じた，複数のアイデンティティ集団が存在していたということである。これらの集団は，固定的であるとは限らないが，何かしらの同質性をもつ一つの集団として存在していた。また，交界区において，「客」を自称する集団はその一部にすぎず，ここの全ての住民が客家であるという認識は存在していなかった。それどころか，交界区の住民のなかには，客家としての自己意識がないばかりか，それを自らとは異なる集団として受け止めていた者も少なくなかった。少なくとも 1980 年代の時点では，交界区の住民を客家という同じエスニシティ名で一括りにする現象は，まだ生じていなかったのである。

3　交界区における客家空間の生産と拡張

以上のように，少なくとも 2, 30 年前まで，交界区＝客家という図式は形成されていなかったわけであるが，現在，交界区を訪れると，ここのほぼ全域が「純粋」な客

家地区であると説明される。また，たとえ表面的であっても，交界区の住民は自らが客家であると主張することが多い。では，我々はこのギャップをどう説明すべきなのだろうか。1980 年代以降，交界区における客家の位置づけにどのような変化があったのだろうか。1980 年代以降の交界区における社会変化を見据えたうえで，この問いに答えを出さなければならない。

3.1　粤東における客家ブランドへの気づき

周知の通り，1980 年代は，中国において変化の大きい時期であった。1978 年 12 月に改革・開放政策が実施されて以降，計画経済と文化大革命による社会的な停滞を反省して，部分的にではあるが，市場を対外開放した。その結果，香港，マカオ，台湾，東南アジアの華僑，および日本，アメリカなどの外資を誘致し，同時に，外部の来訪者を制限つきではあるが，受け入れるようになった。

エルバウフも指摘するように，1980 年代までの中国では，客家であることよりも漢族であることに重点が置かれており，他国に比べると，客家に対する意識が乏しかった（Erbaugh 1996: 196）。だが，中国の外では，1971 年より，香港，台湾および世界の華僑社会に住む客家が世界客属懇親大会（以下，世界客家大会と略称する）を共に開催しており，客家の自己意識と団結力を強めていた[13)]。さらに，1980 年代後半には，台湾で客家としての身分と立場を主張する運動（Martin 1996; 田上 2007）が起こり，同時に，彼らは「故郷」である粤東や閩西への郷愁を深めた。こうした潮流のなかで，交界区の人々は，自らが世界の客家のルーツ，すなわち「故郷」として重要な位置を占めていることを知るようになった。なかでも，粤東の梅州市政府は，世界における「客家の故郷」としての位置づけをいち早く知り，客家を資源とした政策を先立って推進し始めた。

梅州市は，前述の通り 1 つの区（梅江区）と 7 つの県（梅県，蕉嶺，平遠，五華，大埔，豊順，興寧）からなる行政区域であり，人口は約 490 万人である（2003 年）。梅州市は，華僑の輩出地としても有名であり，統計によれば，香港に約 263 万人，マカオに約 2 万人，インドネシアに約 65 万人，タイに約 63 万人，マレーシアに約 38 万人の梅州籍華僑がいる（梅州市華僑志編輯委員会 2001: 29）。だが，1949 年に中華人民共和国が成立し，計画経済を打ち立ててから，梅州市住民は，外部の親戚と連絡こそとっていたものの，往来は限られた。また，梅州市は地理的に交通の不便な山岳地帯にあったため，改革・開放直後の 1980 年代，広東省で最も経済力の低い地区となっていた（Vogel 1989: 242–247）。1984 年に中央政府が山間地域援助計画を推進し

てから生活水準は向上したものの，それでも当時は広東有数の貧困区であり続けた。そうであるから，改革・開放政策実施後，梅州の住民や政府が，海外華僑からの援助や投資を重視したことは，自然な流れということができよう。

1980 年代以降，梅州市は，親族ネットワーク，宗教，政策の各方面で，変化の渦中にあった。まず，梅州市では宗族復興の動きが起こり，1980 年代中葉より宗族基金会を組織し始めた。そして，一族の者から資金を集め，族譜を編纂し直し，祠堂や墓を修復し，年中行事を復活させ，子弟に奨学金を配るようになった。この時，大きな収入源となったのは，香港，マカオ，東南アジアなど外部に住む親戚であり，彼らがどれだけの寄付をしてきたかは，今でも各宗族の祠堂や手記に記録が残されていることが多い。次に，梅州市では，1980 年代半ばより，宗教施設の再建も盛んに行われるようになった。この時，再建の動力の 1 つとなったのは，やはり海外に居住する親戚などであった。例えば，梅州市の道教聖地として知られる呂帝廟は 1985 年に再建されたが，その再建はタイで分祠をつくっていた梅州籍華僑により推進され，華僑マネーを得るために，政府も黙認したものであった。

親族と宗教の側面における外部との交流は粤東住民の客家への関心につながったと

表 2　1980 年代の雑誌『僑声』における客家の記載

巻／日付	記事の概略
2 巻／ 1985 年 4 月	朝日新聞の加藤記者が来訪し，彼らの心のなかで，梅州が黄遵憲（『日本国志』の作者）の故郷であるだけでなく，客家の故郷であることにも気づかされた。
	日本国立民族学博物館の観光団 30 名が来訪し，黄遵憲の故居や，元宵節の習俗を見て帰った。
6 巻／ 1986 年 6 月	シンガポール客家の観光団が来訪し，市の官僚たちと会見した。
	タイの客家たちが「客家山歌民謡研究会」を成立させた。
	タイとの経済的交流を促進するため，広東省華僑事務局がタイ客属総会の工商団を招待し，梅県で視察をおこなった。新中国成立以来，官僚が初めて客属団体を招待した。
11 巻／ 1987 年	9 月 4 日に『梅県地区鼓励外商投資実施辨法』を発布し，海外商人の投資を奨励する法的基盤を整えた。
14 巻／ 1988 年 9 月	広東省華僑事務局の招待でタイ客属総会の会長一行 13 名が訪問し，市，県，区の官僚の歓迎を受けた。
19 巻／ 1989 年 9 月	香港南源有限公司理事長・姚美良が，梅州市の文化人の集まりで，客家文化の高揚と団結のため，梅州市政府の会堂に 8 体の客家先賢の銅像をつくることを提案。梅州市の官僚たちの支持を得た。
	広東省テレビ局と梅州市政府宣伝部の協力により，客家の美しい自然や人工物を収めたドキュメンタリー『客家風情録』が刊行された。
20 巻／ 1989 年 12 月	12 月 9 日，海外客家聯宜会が成立した。

推測できるが，客家という概念の政治経済な有効性により着目したのは，梅州市政府の関連機関であろう。梅州市政府の華僑事務局が編纂・刊行に携わっていた雑誌『僑声』を見ると，1980 年代当時，客家の概念が徐々に政策の舞台にあがっていたことを知ることができる。

表 2 の記述から分かるのは，1980 年代になると，外部（日本を含む）からの位置づけによって，政府サイドが「客家の故郷」としての地位を知り，また，海外投資を誘致する対象として客家総会などを選定していたことである。さらに，1980 年代末になると，客家をモチーフとした銅像の設置，ドキュメンタリーの制作が提案されるようになっている。そして，1989 年 12 月には，梅州市において，客家を結節点に海外ネットワークをつくる世界客家聯宜会が開催された。

交界区の客家政策において，この聯宜会の開催がもらした影響力は，絶大なものであった。そもそも世界客家聯宜会開催の直接の契機は，梅州市の代表団が，1988 年 10 月にサンフランシスコで開催された第 9 回世界客家大会に出席したことにある。そこで彼らは，世界の客家のなかで梅州市が「客家の故郷」と位置づけられていることを確認し，もし客家というブランドをうまく活用したならば，世界中の客家が投資に来てくれると確信した。この時，梅州市の役人は，自らのなかにずっと潜在しつつも活かし切れていなかった客家の有用性を，再確認したのである（彭兆栄 2006: 216–217）。続いて，梅州市政府は，1989 年 12 月 11 日から 13 日にかけて上述の世界客家聯宜会を挙行し，客家華僑を中心とする外部の実業家と，52 項目，6 億 6,000 万ドル相当の外資プロジェクトの契約を結んだ（譚元享 2005: 129）。この会議の成功は，閩西や贛南などの近隣地区にすぐさま伝わり，客家というブランドが，どれだけ金になるかを広く知らしめたのであった（彭兆栄 2008: 5）。

梅州市では，この時から客家の名を掲げた活動が次々と展開されている。1990 年代の梅州市がまず行ったのは，客家の名による外部ネットワークの強化であり，1980 年代後半より行っていた交流活動を継続させた。次に，梅州市政府は，客家研究を促進するため，同市の嘉応大学における客家研究所の設立を支持した。当時の嘉応大学の記録を見ると，1990 年前後には，海外に住む同窓生の来訪，あるいは手紙による激励が少なくなかったことが分かる。また，嘉応大学客家研究所の設立もまた，海外の梅州籍華僑からの後押しがあったという[14]。

前述の通り，戦前の客家研究者は，羅香林をはじめ粤東を「純粋」な客家地区とみなし，粤東を中心とする調査研究を進めてきた。粤東＝客家地区という図式は，1990 年代も継続されており，粤東客家研究の前提ともなっている（房学嘉 1994: 1）。そし

て，さらに重要なことは，21 世紀初頭になるまでには，この図式が学術的な枠組みを超えて，政治的な権威をもつ公的な見解となっていたことである。

その契機となった大きな出来事の 1 つは，まず，1994 年 12 月 6 日から 8 日に梅州市で開催された，第 12 回世界客家大会である。この大会は，前述のように，1971 年から香港，台湾および世界の華僑社会に住む客家により催されており，第 12 回大会は中国では初の開催であった。この大会には，世界 30 ヶ国余り，約 2,000 人の客家関係者が集まり，学術シンポジウム，芸術交流会などさまざまなイベントが 3 日間にかけておこなわれた。そのうち商業上の交流会では，香港や東南アジアで活躍する客家華僑たちにより，総計 6,951 万元（日本円で 10 億 5,000 万円相当）の寄付が市に寄せられ，さらに，19 人の客家実業家と総計 65 億元（日本円で 1,000 億円近く）もの契約を結んだ（夏遠鳴 2012: 64）。他方で，世界客家大会の様子は，梅州市のマス・メディアにより大きく取り上げられ，同市が世界の客家たちの「故郷」であり，それゆえ世界中から多くの客家が大会に押し寄せていることが，住民たちの脳裏に焼き付けられたのであった。

こうした梅州市＝「客家の故郷」という言説が，確たる公式的な見解として認識される契機となったのが，2000 年に提唱された「世界客都」論である。この論は，大埔県の出身者であり中国人民大学の教授であった羅偉雄によって，提唱された。羅偉雄は，「梅州市を現代生態『客都』として建設する」と題した講演をおこない，文化，観光，交通，教育，産業，体育などの各業界が「客家らしさ」を発見し，それを育成していくことで「客家の故郷」としての梅州を建設していくべきと唱えた。羅偉雄の提案は各業界の賛同を得るようになり，この時から，各業界が客家や客家文化を資源として利用することで地域建設を行っていく傾向が加速したのである。

客家を利用した地域開発は，2003 年になると，梅州市の政策の根幹に位置づけられるようになる。梅州市政府は，2003 年 4 月 11 日に「文化梅州」にまつわる戦略会議を開催し，梅州市共産党書記の劉日知により，客家文化を用いて経済発展を促進していく方針が強調された。また，同共産党宣伝部は，これまで客家文化を有効的に使ってこなかったことを反省し，それを都市の特色づくりや文化産業の育成に役立てていかねばならないと論じた。そのなかで，共産党宣伝部の肖偉良が述べた内容は，梅州市における客家の位置と価値を如実に表すものとなっている。

> 「第一に，梅州市は世界の客家が最も集中する地区で，全市 490 万人の人口のほとんどが客家であるため，『世界客都』の称号がある。…（中略）…第二に梅州は華僑の故郷であり，華僑や同胞は熱心に参与するので，文化事業と経済の発展を促す。第三に，『客都』として

の梅州の地位は，世界の客属団体をつなげる紐帯となる」（肖偉良 2003: 50，強調点は筆者加筆）。

この文章から，次の 2 点が分かるであろう。まず，梅州市が自身の行政区と客家をつなげる目的には，とりわけ経済的な意図がある。次に，この行政区の住民は「ほとんど」全てが客家であるという学術的な言説が，政治的な認識にもなっている。ここで注意しておきたいのは，梅州市の住民の 100 パーセントが客家であると断定できないのは，この行政境界内に，移民や婚入などによる，非客家語話者が居住しているからだと考えられる。例えば，梅州市の都市部には，楽善堂を中心とする潮州人コミュニティがある。また，前述のように，豊順の湯南鎮，留隍鎮，東留鎮などにも潮州語の話者がいる。ただし，「世界客都」の提唱以来，梅州市＝客家の空間であるという認識は，すでに世間で定着しつつある。

いくつか例を挙げると，まず，企業は，塩焗鶏，梅菜扣肉，釀豆腐など，梅州の特産と言われるものだけでなく，生姜飴，キクラゲ，牛乳，醤油など，どこにでもある飲食品を「客家」の名で売り出している（夏遠鳴 2012: 66）。ここで「客家」と名付けられる根拠は，梅州市という行政空間内で生産されているという理由ただ 1 つである。同様に，レストラン経営者も「客家」の名で看板や料理の名をつけていたりするが，嘉応大学の夏遠鳴が指摘しているように，たとえ潮州人が潮州料理の店を出していても客家の看板を掲げることがある（夏遠鳴 2012: 65）。他方，最近では，観光会社も客家の名を冠したツアーや企画を立てているが，梅州市にあるあらゆる自然，建築，民俗を「客家」として語っている。なかには，梅州市客郷情旅行社のツアー路線図，および中国旅行社の「客家風情二天遊」（2009 年 7 月）などのツアーでは，豊順の湯南鎮にある千江温泉が含まれていた。この温泉はしばしば「客家温泉」として宣伝されているが，実際にはこの一帯の住民は潮州語の話者が多い。また，筆者は，2008 年 3 月から 2010 年 1 月に梅州市に滞在していた時，湯南鎮の料理が（明らかに潮州料理に近いのに）客家料理として紹介されていたテレビ番組を，何度か見たことがある。2011 年 1 月には潮州市の至るところで見られる湯南鎮の民家が，客家古民居として選ばれたが，ここの住民は客家語と潮州語の双方を使うことで知られる。

これらの事例から分かることは，たとえ潮州人の居住地とされているところであっても，梅州市という行政空間に属しているだけで，「客家」の代名詞をもって宣伝されうるということである。つまり，梅州市＝客家の空間であるというア・プリオリな前提のもと，たとえ異なる言語や文化をもつ集団であっても，客家として表象されるようになっているのである。本稿では，梅州市のような境界をもった行政区（すなわ

ち行政空間）を「空間」と定義し，その空間を一色に塗り変えていくプロセスを「空間化」と呼ぶことにしたい。換言すると，本稿でいう空間とは，境界づけられ，管理される領域を指し，空間化とは，その領域に特定の意味（例えば客家）を埋め込むことで，他とは異なる特殊な空間に転換していく過程を指す[15]。そして，空間化の過程においては，領域内の雑多な「異分子」を排除し，ある特定の意味を均質的に広めていくことで，特色ある空間が仕立て上げられていくのである（河合 2007: 77–78）。

空間と空間化の概念から粤東の事例を見ると，梅州市はもともと 100 パーセントに近い客家で占められるが，同時に，若干の「異分子」（潮州人のコミュニティ）なども抱えると考えられてきた。しかし，客家を資本として地域開発や文化産業を促進した結果，こうした「異分子」までも客家一色に塗り変えられていき（すなわち空間化），均質的な客家空間として転換していくようになったのである。

3.2　閩西における客家空間の生産と拡張

閩西は，粤東と同様に多くの華僑を輩出しており，例えば東南アジアでは，出身者がいくつもの会館を建ててきた。また，台湾にも閩西の出身者が少なからずおり，彼らは「福佬客」などと呼ばれている。それゆえ，改革・開放政策が始まった 1980 年代以降，閩西の住民は，個人的に，あるいは団体で海外の客家団体と接する機会が増えた。その一例として，東南アジア客家の中心の 1 つであるシンガポール客属総会を 1980 年代に訪れた団体のリストを見てみるとしよう（表 3）。

表 3　シンガポール客属総会を訪問した中国の団体一覧（1980–1991 年）

年	訪問した団体名（カッコ内は代表者）
1987	龍岩地区商業考察団
1987	広東経済貿易展覧会（代表者）
1987	寧波市外商投資事務オフィス（代表者）
1988	永定県政府（県長）
1989	大埔県経済考察団
1989	大埔県華僑オフィス（主任）
1989	中国民俗学会（秘書長）
1990	広東漢劇団
1990	広東華僑聯宜会（副主席）
1991	大埔親善訪問団
1991	梅州市政府（市長）
1991	龍岩対外貿易代表団／永定親善訪問団
1991	大埔華僑聯宜会（主席）
1991	梅州市親善訪問団／梅州市観光局（副局長）

出典：呉慧娟（2008: 116–119）

シンガポール客属総会は，1932 年に設立された客家団体である。戦前は東南アジアにおける客家団体の主導的な立場にあり，1986 年までの間，マレーシア，タイ，ミャンマー，香港，台湾，日本などとの往来があった。ただし，戦後から 1986 年になるまで，シンガポール客属総会と中国との関係は希薄であった。1980 年代の来訪者リストを見ると，中国との交流が活発になるのは 1987 年からであり，この年，龍岩市の商業考察団がシンガポール客属総会を訪れている。その後，中国からの来訪者は急増するが，初期の段階では商業目的の視察が主であり，その大部分が閩西・粤東の諸市／県であることが分かる（呉慧娟 2008: 116–122）。このことは，シンガポール客家華僑の多くが永定，大埔，梅県といった閩西・粤東の出身者であるといった，地縁上のネットワークと無関係ではない。また，1987 年から 1991 年の 4 年間において着目されるのは，粤東と閩西の政府関係者もまた，この時期にシンガポール客属総会を訪問していることである。特に閩西に関して言えば，1988 年には永定県政府の県長が訪問しており，交界区で客家が着目されるようになる初期より，政府が東南アジアの客家団体に関心を抱いていたことが明らかである。

こうした状況のなか，閩西の政府が本格的に客家をモチーフとした活動を始めたのは，1990 年代に入ってからのことであった。まず，1989 年 12 月に梅州市で開催された海外客家聯宜会が成功を収めた後，閩西の諸政府は，我こそが客家の中心地であると主張し始めた。アモイ大学の彭兆栄によれば，1990 年代初頭には，閩西，粤東および贛南の関係者は，自らが正統な「客家の故郷」であることを世に示そうと，客家という資源を争奪する動きを始めたのだという。そして，その争奪戦が最もヒートアップしたのは，1991 年 5 月に上海で開催された，第 1 回客家学術シンポジウムにおいてであった（彭兆栄 2008）。

第 1 回客家学術シンポジウムは，学術会議の形式をとってはいたが，交界区各地の地方政府やマス・メディアも参加した政治的な活動であった。ここでは，羅香林による客家の移住史が再確認されたが，では，どこが正統な客家の中心地であるのか論争が起きた。繰り返し論じると，羅香林は，客家が中原→贛南→閩西→粤東のルートを通って移住したと考えていた。また，世界に住む多くの客家華僑は閩西と粤東の移住者であるが，系譜上，彼らの祖先は特に寧化の石壁村に起源すると書かれている。各地の関係者は，こうした系譜上の「史実」に基づき，自らの行政区が客家の中心地であると主張した。例えば，寧化は，系譜上の利点を使って，この地こそが客家の真正なる「故郷」であると主張したため，上海のテレビ局が，寧化まで赴き客家のドキュメンタリーを撮りたいと会議の場で申し出た。しかし，閩西の代表者は，閩西全体を

撮ることを提唱し，寧化だけのドキュメンタリーを撮ることを断った。他方，客家の集住地としての地位を確たるものにしていた梅州市は，粤東こそが「客家の故郷」の中心であると強調した。また，贛州市は，客家の祖先がまず贛南を通っており，ここが客家の居住地であるという前提から，贛南こそが客家の生誕地であると主張した（彭兆栄 2008: 5–6）。

結局，交界区の各区は，羅香林が示した移住ルートに則り，贛南を「客家のゆりかご」，閩西を「客家の生育地」，粤東を「客家の形成地」と位置づけることで，各々の地位を確保した。ここで注目できるのは，粤東・閩西・贛南のいずれもが「客家の故郷」としての立場を示し，その絶対的多数の住民が客家であることを強調していたことである。各地の政府は，自らの行政区が客家の空間であることを主張し，その空間的特色を出すことで，海外の投資者や観光客を引きつけようとしたのである（彭兆栄 2006: 212–222）。

閩西では，1991 年 9 月に閩西客家研究会を，1993 年 7 月に汀州客家研究会を設立するなど，客家地区としての科学的位置づけを促進した。また，閩西が客家の居住地であり，ここの住民が客家であるという認識の下，閩西各地の政府は，客家と関連する施設の保存や建設，あるいはイベントの実施を進めていった。例えば，汀州府の首都であった長汀は，1990 年代に入ると，ここが「客家首府」（客家の一番目の府）であると宣伝しはじめ，客家文化をアピールすることで，1994 年に国から「歴史文化名城」としての称号を受けた。具体的には，この時期，客家にふさわしい文化的建造物や施設が必要とのことから，祠堂や廟の修復を推進した。さらに，県政府は，県城を流れる汀江のそばに広場をつくり，「客家の母」と称する女性の彫刻を立て，「世界客家公祭母親河」（世界中の客家よ，皆で母なる川を祭ろう）と称するイベントを毎年催すようになった（蔡文高 2012: 217, 220）。このような活動を通して，長汀の住民の客家意識を鼓舞していったのである。同様の動きは，長汀にとどまらず，閩西の各地でもみられた。なかでも，1990 年代の閩西で特に客家政策に力を入れたのは，間違いなく寧化であろう。

繰り返すと，寧化は，客家の歴史的な南遷における重要な中継点であり，こうした族譜上の根拠に基づき，自らの行政区を真正なる「客家の故郷」に位置づけたことはすでに見た通りである。ところが，陳支平らが明らかにしているように，寧化を族譜上のルーツとしているのは，何も客家だけにとどまらない（陳支平 1997）。潮洲系住民のなかにも，寧化から移住したという伝承をもつ宗族も存在する。さらに，前述の通り，寧化の住民は，1990 年代になるまで客家としての自己意識をもっておらず，

客家を他集団とみなすことすらあった。だが，1990 年代になると，寧化の政府関係者や知識人たちは突如として，この行政区が「純粋」な客家地区であり，この空間内のあらゆる住民，物質，民俗を客家との関係から説明するようになった。

ただし，1990 年代の寧化における「客家の故郷」建設活動は，県政府の主導により進められてはきたが，その活動の全てをトップダウン式の政策活動と捉えることはできない。寧化は閩西北部の辺鄙な山岳地帯に位置するが，台湾や東南アジア各国に華僑を輩出しているため，1978 年に改革・開放政策が始まると，海外に住む親戚たちが祖先参りに戻ってくることがあった。特に 1987 年に台湾当局が戒厳令を解くと，解放前に台湾に渡った寧化の国民党兵士とその祖先が，祖先参りやルーツ探しなどで「故郷」に戻るようになった。また，粤東の研究者が寧化に来るにつれ，一部の知識人たちは，客家としての自己意識を覚醒していったようである（彭兆栄 2006: 219）。彼らは，内外の交流を通して寧化が「客家の故郷」であったことを知り，1987 年に「客家的第二祖籍――寧化」（客家の第二の故郷――寧化）というパンフレットを出した。さらに，1990 年 4 月には県政府の批准を経て寧化県客家研究会が成立し，同年にこの研究会の会長により「客家祖地を開発する構想と提案」が提出された。続いて，1991 年 2 月には同研究会の責任者であった劉善群が「客家祖地――寧化」という文章を書き，寧化が「純粋」な客家地区であることを文字として示したのであった。

寧化県政府は，1990 年代に石壁村で「客家祖籍地」「世界客属朝聖中心」「客家母親河」「客家公祠」など，客家の名を冠した施設を次々と建設していった。その目的の 1 つは，寧化が客家のルーツであることを視覚的に表し，海外の観光客や投資家を呼び寄せるという経済的なものであった（安煥然 2009: 13）。福建省の副省長であった万享則もまた，こうした建設活動を支持し，1995 年 6 月に客家祖地の建設が経済的繁栄と社会的発展につながることを強調したという（彭兆栄 2006: 220）。

このように，寧化が「客家の故郷」建設をおこなった動機は，客家と名乗ることで地域特色を出し収益を得るという，行政側の経済的な意図が隠されていた。だが，寧化における客家らしい景観の創出には，国内ばかりでなく，海外の客家社会における事情も関係していたことに注意を払う必要がある。例えば，今や寧化客家のシンボルともなっている客家公祠は，1992 年 11 月に着工の式典がおこなわれ，1995 年に落成した。1992 年 11 月の着工祝いの際には寧化客家民俗文化節が催され，10 万人の人が集まったという（彭兆栄 2006: 227; 2008: 8）。この式典に参加した海外からの来客は 23 人であったというが，1993 年になると，客家公祠の建設は特にマレーシア在住客家の関心を集めるようになった。1993 年から 1995 年の間，ジョホール・バル客家公

会会長であった肖光麟が 4 回，ジョホール・バル在住の有力商人であった姚美良が 9 回，その弟である姚森良が 6 回，寧化を訪問して客家関連のイベントに出席した（安煥然 2009: 13–14）。彼らは，客家公祠の建設をはじめとする寧化の客家建設活動に多額の補助をしたが，なかでも姚美良は 100 万元（日本円で 1500 万円相当）の寄付をしたという。寧化の「客家の故郷」建設は，このように海外の客家による援助がなくては成り立たなかったかもしれない（彭兆栄 2006: 228）。

ただし，特にマレーシアの客家たちが寧化における「客家の故郷」建設活動を重視してきたのは，単なる「故郷」への愛着にとどまるものではなかった。マレーシア南方大学の安煥然は，当時のマレーシアが寧化を重視した理由として，ジョホール・バル客家公会における内部分裂があったと指摘している。安煥然によれば，1990 年代当時，ジョホール・バル客家公会の内部では分裂が起きており，公会が 2 つに割れていた。だから，当時のマレーシア客家界は，たとえ歴史的な想像物であっても，出身地を超えた客家共通の「故郷」を中国で建設する必要を感じていた。その意味で，多くの客家にとって系譜上の「故郷」とされている寧化は，マレーシア内部の葛藤を回避するのに都合がよかった。それゆえ，マレーシア客家連合会会長を兼ねていた公会の会長・肖光麟や姚美良・姚森良兄弟ら中心人物は，寧化における「客家の故郷」建設活動に積極的に協力したのである。換言すれば，彼らの寧化における活動参与は，ジョホール・バルにおける客家の内部分裂を調整し，権力を建て直すという意味合いももっていた（安煥然 2009: 14）。

このようにして，寧化は，国内外の利害を一致させながら，客家の空間としての地位を獲得するようになった。もともと歴史的な記録のうえでも住民のアイデンティティのうえでも客家と結びつけられていなかった寧化は，「客家の故郷」の中心地の 1 つとして中国社会で認識されるようになっている。角度を変えて見るならば，寧化における客家空間の生産は，中国国内外の政治経済的利害に後押しされた捏造とみることができるかもしれない。

寧化のように，自身の行政区が客家の空間であると規定し，その前提から地域建設を進める傾向は，筆者が 2004 年 11 月から 2010 年 1 月まで観察した限り，龍岩市の各県（永定，上杭，武平，連城）でも見られた。例えば，永定では，1990 年代まで全ての住民が客家としてのアイデンティティをもっていたわけではなかったが[16]，ここの有名な建築物である円形土楼（写真 1）は，客家のイメージと結び付けられる傾向にある（小林 2009）。なぜ土楼が客家と結びつくのかといえば，言うまでもなく永定が客家の居住地であるとア・プリオリにみなされるからである。また，上杭，武平，

写真 1　円形土楼

連城では近年，客家文化公園，客家生態文化城，客家民俗文化生態保護区などが建設されているが，これらの施設に客家の名が冠されるのも，閩西に属す諸県が「純粋」な客家地区であるとする空間的な前提によるものである[17)]。

おそらく閩西のなかで，最近まで客家と関係した政策を行ってこなかったのは，北部に位置する清流と明渓であろう。繰り返すと，両県は，羅香林により客家人口 30 パーセントほどの県とみなされており，政府の公式ホームページにも客家にまつわる記載がほとんどみあたらない（2011 年 12 月アクセス）。隣に位置する寧化と比べると，客家への無関心さが目立つ。だが，こうした状況も，ごく最近になって変化が訪れているようである。2011 年に清流が客家民俗園の建設を始めたことは，その変化を物語る象徴的な出来事である。

では，なぜ清流，明渓の両県が客家を重視しだしたかというと，第 25 回世界客家大会が 2012 年 11 月に三明市で開催されることになった背景と関係している。これらの県は，羅香林こそ客家人口 30 パーセントほどの県とみなしていたが，1990 年代以降は「純粋」な客家県であると描かれることもあった。それゆえ，清流，明渓の両政府は，最近になって，ここが客家の空間であることを示そうと動きだした。だが，閩西において，政府が客家空間として重視し始めたのは，実際のところ清流，明渓に限られない。2010 年に広東省河源市で催された第 23 回世界客家大会の席では，三明市の書記である黄琪玉が，「2012 年第 25 回世界客家大会申請の陳述報告」と題して次のような発言をした。

「三明市は福建省の中部にあり，面積は2.29万平方メートル，12の県（市，区）を管轄しています。そのうち，10が客家県であり，200万近くの客家人口を抱える，福建客家の中心地の一つであります」。

つまり，三明市の最高指導者により，三明市の約70パーセントが客家であるという見解が公的に発表されたのである。

図3で示したように，三明市は2つの区（梅列区，三元区）と10の県（寧化，清流，明渓，永安，大田，龍渓，沙県，将楽，泰寧，建寧）を抱えている。だが，この宣告が発布されるまで，一般的に三明市の客家地区といえば，閩西（旧汀州府）の範囲に含まれる寧化，清流，明渓の3県だけであった。しかし，この宣告が市政府のトップによりなされたことで，これまで客家地区として考えられることの少なかった中・西部の各県／区（例えば梅列区，三元区，永安，大田，龍渓，沙県）までもが，客家空間としてまさに生産されようとしている。

これに対する住民の反応は，冷ややかである。このことを知った沙県のある中年男性は，「もともと三明市には西部を中心に20パーセントしか客家がいないのに，なぜ彼らが三明市を代表するのか」と不満を口にしていた。また，三明市には，客家としての身分を知らない者も数多い。しかし，他の交界区の住民がそうであったように，三明市の住民も，いずれは客家としての自己を語り始める日が来るのかもしれない。閩西においては，客家空間が既定の範囲で生産されているだけでなく，その範囲は次第に拡張しているのである。

3.3　贛南における客家の利用と空間化

こうした客家の空間をつくりあげるプロセスは，贛南でも顕著に見られる。前述のように，贛南は今でこそ「純粋」な客家地区であると思われがちであるが，もともと本地人，客籍人など複数のアイデンティティをもつ集団があった。そのうち贛南の南部に主に住む客籍人は，戦前から客家と同一視されることもあったが，北部や西部に住む本地人は，必ずしも客家としてのアイデンティティをもっていなかった。特に後者は，幼少期から客家としての自己意識をもたず，後に学校教育やマス・メディアの宣伝などから，自分が客家であると知ったのである。贛南東部の石城出身である黄志繁は，次のように述べている。

「1990年のある日，贛南のある大学で筆者が歴史の授業を受けていた時，先生が突然，贛南は全国最大の客家居住地であり，その人口の95パーセントが客家で，客家は中原から南下してきた優秀な民系だと言いだした。この話は私と周りのクラスメートを興奮させた。

なぜなら，このローカルな師範大学では，学生のほとんどが贛南の出身者だったからである。これは私たちがみな中原から南下した優秀な漢族の子孫──客家であることを意味した。興味深いのは，私は幼い頃から贛南で生活してきたにもかかわらず，この授業を受ける前は自分が客家であると知らなかったことだ。私の客家としての身分は，先生によって『宣告』されたのである」（黄志繁 2007: 56）。

何度も繰り返すように，贛南は客家の移動ルートに位置していたため，贛南が客家の生育地であり，その住民の絶対的多数が客家であると考える学者は，当時すでに存在していた。だが，1990 年の段階では，こうした見解は，まだ学界の一部にとどまっており，社会的な共通認識ともなっていたわけではなかった。また，贛州市政府の関係者も 1989 年 12 月に梅州市で開かれた世界客家聯宜会の成功を目の当たりにするまでは，客家を政策的に利用することもなかった。

当時の贛州市政府における客家への注目度は，贛州市の政府機関紙である『贛南日報』を紐解けば一目瞭然である。贛南師範大学の周建新と柴可によれば，この地元新聞において初めて客家が登場したのは 1990 年 6 月 16 日で，しかも第三面の真ん中に客家女性が頭巾をかぶった写真が掲載されているだけであった。『贛南日報』の掲載に変化が現れるようになったのは，1991 年からで，同年 2 月 3 日の記事には，贛南の住民が中原から移住した客家の末裔であることが初めて説明された。続いて，同年の 10 月 5 日に「贛南──客家の重要なゆりかごの地」という文章が掲載され，現在の贛南をめぐる公式的な見解，すなわち，①贛南が客家の生育地（ゆりかご）であり，②贛南のほとんどの住民が客家であること，が宣言されたのである（周・柴 2012: 83–86）。また，1994 年になると，贛南という行政空間にあって比較的特色をもつ物質や民俗，例えば擂茶，チャルメラ，山歌などが客家の名のもとで語られるようになった（周・柴 2012: 88–89）。言うまでもなく，これらの人物，物質，民俗が客家と結び付けられている背景には，贛南をア・プリオリに客家の空間とみなすイデオロギーに基づくものである。

こうした贛南＝客家空間という図式は，1990 年代になると，学界によっても定式化されるようになった。まず，1990 年には贛南師範大学の羅勇を中心とした贛南客家研究のプロジェクト・チームが立ち上げられ，その翌年，同大学で客家研究センターが成立した。続いて，同年，江西省人民政府の批准により江西省社会科学院でも客家研究のプロジェクト・チームが立ち上げられ，贛南客家の形成や文化的な伝統などに対する調査がおこなわれた（周建新 2007: 14–15）。そのうち，後者の調査成果は「江西客家概述」という論文にまとめられているが，ここでは，羅香林が「二級客住

県」とした諸県（南康，于都，会昌，安遠，寧都，興国，石城，瑞金）までもが，「純粋」な客家地区として描かれている[18)]。

ただし，贛南を「純粋」な客家の空間とする言説は，紙媒体のうえでは1990年代にすでに登場していたが，それが贛南全住民の誰もが知る「常識」となり，客家らしい景観が目に見える形で建設されるようになったのは，それほど早い時期ではない。潜在的な準備期間を除けば，そうした動きが本格的に始動したのは，21世紀に入ってからである。特に，第19回世界客家大会が2004年に贛州で開催されることが決まると，贛南の政府やマス・メディアは，その準備のための活動に取り組んでいった。その活動は多岐にわたるが，2000年から2004年の5年間で取り組まれた関連の活動には，以下のものがある。

（1）贛州市共産党宣伝部の支持の下，贛州テレビ局の撮影チームが，5年の月日をかけて，贛南各地の自然，建築物，民俗などを撮影した。客家の名のもとで撮影した映像『客家揺籃――贛州』（『客家のゆりかご――贛州』のなかには，寧都など，贛南北部の年中行事も含まれている。贛南を客家空間と想定したうえで，そこの人物，物質，民俗が客家の言説で説明されている。

（2）2004年の世界客家大会に向けて，贛南を紹介する書籍の準備が進められた。江西人民出版社から刊行された『客家贛州』や『客家揺籃――贛州』は，大会で専門家たちに配布された。両書とも，贛南が客家の生育地（ゆりかご）であること，贛南のほぼ全ての住民が客家であることが描かれている。

（3）贛州市の中心地（章貢区）の章江と貢江が交叉する地点で，宋城の城壁，孔子廟などを整備し，客家の特色ある景観をつくりだした。その目玉となったのが，高さ5メートル，直系4メートル余りの鼎で，2004年8月に設置された（写真2）。この鼎の3本の脚のうち，1本は粤東を，1本は閩西を，1本は贛南を示しており，贛南もまた重要な客家の「故郷」であることを意味している。

（4）第19回世界客家大会を前にして，客家文化城が竣工された。なかには，客家博物館，芸術長楼，客家宗祠などが建造され，特に客家宗祠では各姓の位牌を設置し，世界中の客家がここで参拝できるよう工夫した。また，客家のシンボルともされる円形土楼型の建物も建造された。先述の通り，円形土楼は閩西の永定を中心とする一部の地域に限定された民居であるが，贛南が客家空間であるとする前提から，ここでも円形土楼に模した建築物がつくられた。

このほかにも，五龍客家風情園など，客家と関係するテーマパークが章貢区やその

写真 2　客家鼎

郊外の贛県で次々と建造された。繰り返すと，章貢区は西南官話を操る贛州人がほとんどであるし，贛県の住民も客家としての自己認識を抱いていたわけではない。しかし，贛南が客家空間であるという前提から，大会の際により多くの来客の目につく都心部に関連の施設を設け，ここが贛南と客家とを視覚のうえで焼き付ける努力がなされてきたのである。

実際，筆者は，2003 年 8 月と 2004 年 11 月に贛南を訪れ，客家と関連するこれらの施設が建設される様相を観察した[19]。この時は，市の政府関係者の接待を受けたのだが，やはり贛州が「純粋」な客家の居住区であるという説明を受けた。街には「客家」と掲げられた看板が乱立しており，ほとんど政府関係者や学術関係者の話しか聞かなかったので，最初は贛州＝客家地区という「常識」的な見解を信じて疑わなかった。2004 年 11 月に開催された第 19 回世界客家大会でもまた，①贛南が客家の生育地（ゆりかご）であること，②贛南の約 800 万人（すなわちほぼ全ての）の住民が客家であることが宣言されており，また，その様子はテレビや新聞でも大きく取り上げられていた。贛南を客家空間とする政治的言説は，少なくともこの大会で明確に語られていたのである。

1994 年に梅州市で開催された第 12 回世界客家大会と同様，この第 19 回世界客家大会でもイデオロギーの面で，また経済の面で成功を収めた。この大会には 22 の国から約 3,000 人もの関係者が集まり，広州市長を歴任した客家である葉選平が「客家のゆりかご」という文字を書いた。他方，商業の上でも 75 項目，21 億 800 万元にも

表 4「贛州市観光発展総合計画」（2005–2020）における客家の使用状況

位置	該当する市／県	内容
南　部	全南，龍南，定南，安遠，尋烏	囲屋など，贛南の特色である民居を客家の歴史文化遺産として売り出す
中　部	章貢区，贛県，南康，于都，信豊	都市部や郊外のリゾート地をつくり，贛県の白鷺村など客家の古村落を保存したりする
西　部	上猶，崇義，大余	自然を使ったリゾート開発をする
北東部	瑞金，会昌，寧都，興国，石城	革命を使ったリゾート開発をする

のぼる契約を結んだといわれる[20]。

客家が金になることを改めて知った贛州市政府は，その翌年に「贛州市観光発展総合計画」（2005–2020）を立案し，客家を用いた文化政策の推進を計画した。この計画書では，第 19 回世界客家大会で「客家のゆりかご」としての贛南の地位が確たるものになったことを確認したうえで，第 2 章第 1 節で，客家を利用したさらなる地域建設について青写真を描いている。この計画書では，特に贛南の南部と中部で客家を利用した観光開発を促進することが述べられている（表 4）。

繰り返し述べると，羅香林が「純客住県」に位置づけたのは表 4 のうち南部と西部であり，そのうち南部は，観光客も多く，資源も多い区域として，客家観光の中心地となっている[21]。また，世界客家大会を前に鼎や客家文化城を建設した中部も，客家観光の対象となっている。ただし，中部各県の住民は，必ずしも客家としてのアイデンティティをもっていなかった。例えば，客家の古村落として観光の目玉の一つとなっている白鷺村は，もともと客家とは縁もゆかりもない村であった。しかし，この村落は多くの科挙合格者を出し，立派な民居が保存されているため，客家の名目で宣伝し，より多くの観光客を集めようとしている。つまり，この村落もまた，経済的な目的のために客家として空間化されたのである。

こうした空間化の現象は，近年，特に贛南北部の諸県にて広まっている。繰り返し述べると，寧都，興国，石城など北部の諸県は，本地人のアイデンティティをもつものも多く，羅香林の認識をもってしても客家の少ない地区であった。それゆえ，ここ 20 年の間，これらの県の住民は，客家としての身分を外から押し付けられることとなった。そうであるから，彼らのなかには客家としての身分を素直に受け入れられない者もいた。2004 年 11 月に筆者が章貢区を訪れた時も，ある寧都出身の運転手は「政府は俺たちが客家だというが，そんなことは絶対にありえない」と断言していた。

にもかかわらず，北部の諸県は近年，ここが「純粋」な客家県であると公的に宣伝

するようになっている。寧都を例に挙げて論じると，寧都県政府は，第 19 回世界客家大会終了後，この県を「早期客家のゆりかご」として主張するようになった。2005 年 3 月 12 日付けで公表された同県のホームページでも，やはり「早期客家のゆりかご」としての寧都が強調されており，その前提のうえで，この県の実に 98 パーセントの住民が客家であると記載されている。この数値は，同県の客家人口を約 30 パーセントとした羅香林の見解とは大きく食い違っている。そして，寧都県政府は，同県を客家空間とア・プリオリに想定したうえで，ここの物質や民俗についても，客家の名の下で語るようになっているのである。また，近年では，寧都が客家空間である前提のもと，開発業者の手で，客家民俗博物館や客家文化民俗風情園の建設も進められている。この種の開発は，興国でも同様におこっている[22)]。

贛南におけるこうした空間化は，中部と北部だけに起きているわけではない。南部の信豊でも同様の現象をみることができる。信豊は，南部にあるが，そこの県城には客家語とは異なる西南官話の話者が住むことで知られる。地方誌においても，ここが客籍人の居住地であると記載されておらず，学者たちもまた，章貢区と並ぶ非客家の住む飛び地であると考えてきた。ところが，ここ 2，3 年の間に，信豊県城もまた客家空間に呑みこまれつつある。客家を用いた対外交流を促進するべく，信豊は，2010 年 2 月に信豊客家聯宜会を創設した。2010 年 2 月 5 日，この聯宜会の創設にあたって市と県の代表たちが祝辞を述べたが，この時，信豊客家聯宜会の副会長や秘書長により，信豊もまた「純粋」な客家地区であると公言された。また，贛州市の市政協副主席である潘其楽は後に，祝辞の手紙で以下のように述べた。

> 「信豊では，客家聯宜会が成立して以降，宣伝により客家意識が次第に高まっている。章貢区と信豊県城の人々は客家語こそ話さないが，彼らが客家ではないとは言えない。客家地区で生活していれば，客家文化が伝承され，客家の民俗風情が身についてくるものなのだから」。

このように，贛南にあって客家意識に乏しかった地区においても，贛南＝客家空間とする言説を受けて，その位置づけをシフトさせるようになっている。贛南という空間にいる住民は，もともと客家を別の集団であると考えていたとしても，客家としての身分を新たに獲得せざるを得ない状況になっているのである。北京師範大学の万建中は，「私の妻は廖姓で寧都人であり客家に属している。だが，言い伝えでは〔妻の祖先は〕遼寧省から来ており満州族の血統をもつという」［括弧は筆者補足］（万建中 2009: 106）と述べている。もともと別の民族であると考えられてきた者でさえ，客家に属するようになっているのである。そして，満州族から客家へ移行する圧力となっ

たのは，言うまでもなく，贛南を客家の領域とみなす空間的な前提である。

4　シミュラークルとしての客家空間

このように，1980 年代以降，交界区は全域的に客家の空間として変貌を遂げ始めている。客家空間の範囲は不断に拡大しており，近い将来，交界区の範囲すら定義し直す必要があるかもしれない。

粤東，閩西，贛南それぞれの事例を見れば分かるように，1990 年代以降，交界区における客家空間の生産を主導したのは主に地方政府であった。市／県政府は，外部の投資者や観光客を招くため，自己の行政区を客家という特色を備えた魅力的な空間とし，その境界内にある住民，物質，民俗を客家と結び付けてきた。また，建築物，公園，彫像などを使って客家らしい景観をつくりだすことで，ここが客家の空間であることを視覚的に知らしめ，外部者への吸引力を強めようとした。

ただし，上記の事例でも取り上げたように，交界区が客家の空間であるという思い込みや言説をつくりだしたのは，何も地方政府だけではない。学術，食品会社，レストラン経営者，デベロッパー，旅行会社，さらには民間の宗族といった複数の主体が，交界区を客家の空間に仕立て上げる役割を担ってきた。

なかでも学術は，交界区が「純粋」な客家であるとする公的見解をつくりあげるのに，重要な役割を果たしてきた。その重要な礎をまず築き上げたのは先述の羅香林であり，彼は，族譜や伝承に基づき，粤東の全域，贛南の南部，そして閩西の南部や寧化などを「純粋」な客家地区とみなした。続いて，1980 年代に入ると，中国国内の学者たちは，羅が指示した客家地区をさらに拡大させ，今日の交界区の行政範囲とほぼ一致させた。

学術が客家の居住範囲を規定する際，有力な根拠の 1 つとしたのは言語である。ただし，上述の通り，同じ客家語と言っても実際には多様性があり，互いに意思疎通がとれないことも珍しくはない。客家という集団を学術的に規定する際，言語はあたかも「客観的」な根拠を提供しているかのように見えるが，何をもって客家語とみなすかは，多分に研究者の主観に左右されている（瀬川 2003: 120）。例えば，客家語と贛語は，かつて同じ漢語方言として括られていたが，1987 年には別の言語として切り離され，贛南という客家空間に位置する言語のみが客家語となった（蔡驎 2005: 209）。また，広東省河源市の水源語も，広東語であるのか客家語であるのか言語学者の間で論争が繰り広げられてきたが，河源市が客家空間であり，ここの住民が客家で

あるという理由により，客家語の系統に組み込まれた（河合 2012: 140–145）。さらに，福建省のショオ族は，客家語かそれに類似する言語を話しているが，彼らの居住区は，客家語の分布図において非客家語地区に分類されがちである（瀬川 1993: 121–124）。このように，言語学の分類作業は科学的な装いを見せているが，どこに客家語の標準を設け，どこを他言語との境界線とみなすかは，その時代における権力性が関わっている。特に，現在的な文脈で言えば，ある言語が客家語であるか他の言語であるかを線引きする 1 つの判断材料となっているのは，そこが客家空間に属しているか否かであると考えられる。つまり，交界区の範囲を境界線とし，その空間に属する言語を操作的に客家語の系統に組み込んでいる，と推測できるのである。

ただし，他方で，粤東の梅県方言を標準的な客家語とする言語学の基準[22] からすれば，明らかにこれと非連続的な言語が交界区に存在することも確かである。これまで取り上げてきた豊順の潮州語，贛州市内と信豊県城の西南官話，他には，永定孔夫村の孔夫語（閩南語系），武平中山鎮の軍家話（官話）などが，それに相当する。これらの言語が使用されている地区は，客家語が主流を占める交界区において言語的な「飛び地」であるとみなされており，俗に「方言島」と呼ばれる（胡・莫・董・張 1997: 27–36）。それゆえ，言語を「客観的」な根拠の 1 つとして客家を規定する学術は，客家語の使用範囲と交界区の行政範囲とを可能な限り近づけたが，交界区の 100 パーセントの住民が客家であるとする発言には慎重であった。

しかし，学術的な見解は，社会領域に転換される際にしばしば拡大解釈される。とりわけ食品会社，旅行会社，デベロッパーといった営利団体は，交界区＝客家空間という大まかな見解だけ捉えて，客家を売りにした商業行為を展開している。例えば前述の通り，食品会社は，交界区という空間に属しているだけで，醤油，牛乳，キクラゲのようなどこにでもある食品を，客家の名のもとで売るようになった。同様の事例は，土産物屋やレストラン経営者の事例にも当てはまり，彼らは，交界区にあるというだけで，時には別のエスニシティ（潮州人など）の食品までも客家料理や客家土産などの名で売り出している。それにより，買い手もまた，交界区が客家の空間であるという認識を得ることがある。

こうした傾向は，デベロッパーや旅行会社にも同様に見られる。まず，デベロッパーは，交界区において開発を行う際，市／県政府の意向をしばしば汲み取る。それゆえ，彼らが交界区でリゾート開発する際には，客家公園，客家城など客家の名を冠した施設をつくる。また，客家の名を使うことは特色づくりにもつながるので，デベロッパー側も進んで客家と関連した施設を建造することがある。こうした動きのなか

で顕著なのは，円形土楼を模倣した建築物をつくることである。円形土楼は，そもそも永定とその周辺にしか存在しない伝統民居であり，周辺の南靖，饒平，潮州では，閩南系住民が円形土楼に住んでいることがある。だが，客家地区とみなされる永定のそれが有名であるため，土楼は，客家建築のシンボルとなり，今や梅州市，贛州市，河源市，および四川省，台湾，シンガポールなどの客家地区に円形土楼を模した建築物が次々と建てられている。特に，梅県では，広東宝麗集団が早くも 1995 年 1 月に雁南飛リゾート村を投資・開発したが，この敷地内では 2003 年に囲龍食府という円形土楼を模したレストランが創られ，粤東の食事や歌劇を客家の名のもとで提供している。また，近年では，梅州市郊外の梅県新城で，円形土楼を模したマンションも建造された。もちろん梅県にはもともと円形土楼はなかったが，それは客家を表すシンボルとして用いられ，ここが客家の空間であるという視覚的な印象を強めている（河合 2009: 86–87）。次に，そのようにしてデベロッパーにより開発された景観は，今度は旅行会社の客家文化体験ツアーに組み入れられ，観光客に見せる。すでに述べたとおり，旅行会社は，交界区のあらゆる自然，建築，民俗を客家と結び付けて企画を立てており，もともと客家とは言い切れない地区まで「客家観光ツアー」の路線図に入れている。

客家の名を用いて利益を得ようとしているのは，これらの営利団体に限られることはない。民間の宗族まで客家を活用するようになっている。宗族は，改革・開放後に海外の親戚を呼び寄せる重要な役割を果たしており，その過程で客家としての自己意識が喚起されることもあった。ただし，彼らが客家を近年使うのは，往々にして親族内部より外部に対してである。例えば，交界区の外から来客があった時には，彼らは客家を名乗り，自らの衣食住や風俗・習慣が客家文化であると言う。特に，彼らは自己の伝統的な民居や行事を守りたい時，過度に客家を強調することもある。

いくつか例を挙げると，粤東の梅江区に住む A 宗族は，数百年の歴史をもつ彼らの古民居を，都市開発の魔の手から守りたいと考えてきた。そこには，彼らの祖先の位牌が祀られており，また祖先の偉大な足跡を表すモノ（例えば「文魁」「武魁」と書かれた額や「旗杆」[24] など）が残されているからである。そこで，彼らが思いついたのは，彼らの古民居が客家文化に溢れており，保存の価値があることを市政府にアピールすることであった。その結果，A 宗族の古民居は，ごく最近になって，保護の対象として認定されたのである。似たような現象は，B 宗族でも見られた。ここでは 1000 年以上の歴史を守る祖先の墓を守るため，周囲の環境を整え，公園を建設することを思いついた。そして，春祭りや秋祭りの祖先祭祀を客家文化の名で行うこと

で，客家らしい空間を演出しようとする市政府の政策に，協力する姿勢をとってきたのである。

これらの複数の主体による客家空間の演出は，目的こそ違え，各自の経済的，政治的な利潤を得ることに関係していた。特に，中国における市場経済化の動きが加速した 1990 年代，交界区が他とは異なる特殊な空間であると見せかけることは，外部の参入と協力を得るために必要不可欠であった。もし交界区が何の変哲もない，どこにでもある空間であったならば，外部の観光客や投資者にとって何の魅力ももたないからである。1980 年代以降の交界区における客家概念の意義と役割を検証すると，客家が空間的な特色をつくるための「武器」となっていたことは明らかである。前節で検討してきたように，交界区の各市／県政府は，まず自己の行政区を客家空間としてみせ，空間的な特色と魅力でもって外部から経済的利益を得ようと努力してきた。

こうした動きは，著名な経済地理学者であるデヴィド・ハーヴェイが，「時間－空間の圧縮」と呼んだ現象と軌を一にしている。ハーヴェイによれば，1970 年代より情報社会に突入して以降，世界各地の情報が瞬時に伝わるとともに，飛行機などで簡単に移動できるようになった。それにより，世界各地の空間は均質的になり，どこへ行っても同じような光景が散見されるようになった。だが他方で，もしどの空間も同じようなものであったら，外部者にとって何の魅力ももたなくなる。それゆえ，情報社会への突入後，各地の行政空間では文化を利用して魅力ある空間をつくり，観光客や投資者を引き寄せる傾向が生じているのだと，ハーヴェイは指摘する（Harvey 1990: 295–395）。

ハーヴェイは，情報が瞬時に流れ（時間の圧縮），空間の均質化が起こる（空間の圧縮）ことで，逆に，世界各地の空間的特色がつくりだされる現象を指摘している。こうした現象は，言うまでもなく，市場を対外開放した 1980 年代以降の交界区にも該当するものである。すなわち，交界区は山岳の交通の不便な場所に位置するため，とりわけ華僑を中心とする外部の資本を必要としていた。それゆえ，客家を活用し，自らの行政区を客家文化に溢れた魅力的な空間とすることで，外部の投資者や観光客を招こうとした。その手段の 1 つとして，交界区を客家の「故郷」とし，そこには中原にルーツをもつ「特殊」な文化が内在するといった見解が採用されていった。寧化や贛南の北部諸県にみるように，住民に客家としての自己意識がなく，客家とつながりが薄かったところでさえ，経済的な利益を得るために，客家の空間へと転換していったのである。

交界区における客家空間について注意すべき点は，客家の空間を演出しようとする

政策的，学術的，商業的行為が，しばしば住民の客家意識の外で先んじてなされていたことである。もちろん粤東やその周辺地域の住民を中心とし，1980 年代以前に客家としてのアイデンティティをもつ者もいたが，寧化や赣南の北部諸県をはじめとする多くの地区では，住民に客家としての自己意識がないまま客家関連の政策が推進されていた。それゆえ，交界区の少なからずの住民が，1990 年代以降，客家としての自己に覚醒したり，あるいは客家としての自己に戸惑いを感じたりするようになった。

ここで断っておきたいのは，筆者は，だからといって交界区が客家空間であるとする認識が誤りで，そこの空間の多くが実は客家ではなかったと言うつもりはない。交界区が客家空間であるとする認識は，もはや「真実」となっており，交界区の住民の日常生活にも影響を与えているからである。民族やエスニシティは，そもそも時代ごとの政治経済的条件に応じて，その範疇を臨機応変に移りゆくものである（瀬川 1993）。筆者は，1980 年代以降の政治経済的条件に応じて，客家というエスニシティの範疇が交界区の政治空間と一致するようになっていることを，交界区の事例から指摘したいのである。

今や交界区では，ここが客家空間であるという前提のもと，その空間に属するあらゆる事象を客家と結びつける動きがある。特に，交界区の住民だけでなく，交界区の特殊性をアピールしうる特殊な物質（円形土楼，擂茶など）や民俗（山歌，客家の母なる川へ祖先への祭祀）を客家と結びつけ，空間を特色づける記号として生成され続けている。この動きは，大きく 2 つの流れに分かれている。一方で，交界区では，客家としての共通性をもつ空間を生産する流れがあり，例えば，円形土楼や山歌を交界区で普及させることで，ここが客家の空間であることを強調する。だが他方で，交界区の空間がみな同じであるならば，粤東，閩西，赣南の各市／県は，空間的な特色を失ってしまう。それゆえ，交界区の各市／県は，言語や文化のうえで差異があることを逆に利用し，各地「固有」の空間的特色をさらにつくりあげようとしている。例えば，閩西が円形土楼を本家として強調するならば，粤東は現地の特色ある民居である囲龍屋を，赣南は囲屋や擂茶を強調するといった具合に，である。そのうえで各行政区は，粤東客家文化，閩西客家文化，赣南客家文化といった，行政区に応じたさらなる下位区分を生み出し，空間的特色をつくりだそうとしている[25)]。

以上のような統合と差異の論理により，交界区は，客家空間として現実味を帯びるようになっている。つまり，交界区は，客家という記号に溢れたシミュラークルの空間へと転換されているのである。フランスの社会学者ボードリヤールによれば，現代

社会では，何が本物で何が偽物であるかの区別が曖昧になっており，消費行為のためにシミュレーションされた記号により埋め尽くされている。そうして生み出された記号は，現実社会の消費行為を支えるシミュラークルとなり，人はシミュラークルの世界の中で生活するようになる（Baudrillard 1981）。こうした視点から捉えると，交界区が客家空間であるとする想定もまた，経済的な利潤獲得のためにシミュレーションされた想像の産物であり，そうして生み出された諸記号（円形土楼，擂茶，山歌，客家の祭祀）の生産 - 消費を通して，現実社会が構成されるようになっている。すなわち，このシミュラークルの空間では，多様な行為者が金銭的な利益を得るために客家の名を冠した記号を生み出し，そうして生み出された諸記号は，外部から訪れた観光客や投資者により，もしくは交界区の住民により消費されるようになっている。こうして，客家は，交界区において空間的特色を醸し出し，生産 - 消費の循環を支える資源となっているのである[26)]。

5　結語

繰り返すと，交界区が「純粋」な客家空間であるとする見解は，客家をめぐる「常識」となっており，今日の中国では，祖先が交界区に居住していただけで客家であると考えられる傾向すらある。しかし，交界区＝客家空間とする言説が 1980 年代以降の社会的条件により後につくられた想像物であることは，本稿の議論より明らかである。本稿で明らかになった事項をここで再度整理すると，以下の通りである。

第一に，1980 年代以前の交界区をめぐる諸記録，およびその住民のアイデンティティを検討すると，交界区の全てが必ずしも客家と結び付けられていたことがないことは明らかであった。交界区において客家の居住地として描かれがちであったのが粤東だけであり，特に閩西北部や贛南北部の諸県は，しばしば客家の少ない地区として描かれてきた。また，これらの諸県の住民は，客家としての意識に欠如しており，客家とは別の集団であると考えられることすらあった。外的な史料や内的なアイデンティティから総合的に判断するに，少なくとも 1980 年代までの時点で，交界区が客家であるという見解が普遍的に存在していたとは考えにくい。むしろ，交界区は，言語・文化・アイデンティティを共有する，いくつかの集団により割拠される地区であったと考えた方がよさそうである。

しかし，第二に，1990 年代以降の諸記録や口頭資料を検証すると，客家居住区の範囲が交界区という空間にまで拡大されてゆくプロセスをみてとることができる。す

なわち，1980 年代までの時点で，客家は，粤東を中心とし，それと言語的・文化的にゆるやかなつながりのある地区に限定されていた。例えば，粤東の客家語と意思疎通の可能な上杭，武平，龍南，全南，定南，河源市の諸県など，あるいは，系譜的なつながりのある長汀，寧化，粤東移民の移住先などがそれに該当する。こうした客家の概念は，粤東を中心とするネットワークを通して，「線」として形成されてきたものである。しかし，1990 年代以降になると，客家を指す概念範疇が変化し，これまで客家と結びつけられることの少なかった閩西の北部や贛南の中部・北部にまで拡大することとなった。その原因に，閩西や贛南が各々の行政空間を基盤として特色をつくり，外部の投資者や観光客を呼び寄せようとする政策的行為があったことは，上記で見てきた通りである。

第三に，このような空間政策のもとで，食品会社，レストラン経営者，デベロッパー，旅行会社，宗族は，それぞれの利潤を追求するために客家を活用した。具体的には，交界区＝客家空間という認識のもと，交界区における住民，物質，民俗を客家と結びつけ，その空間的な特殊性を支える各種の記号を生成したのであった。これらの記号は，客家文化産業の発展と結びつき，交界区の生産‐消費サイクルを支える資源となっている。また，交界区における客家らしい景観の創出，あるいは客家の名を冠した商品の流通は，交界区内外の人々に，交界区＝客家空間という「常識」を刷り込む要因の 1 つとなっている。つまり，客家のカテゴリーを「線」から「面」へ拡大させるという権力作用によって，交界区の一部を指すにすぎなかった「客家」（「哈」としての集団）が，現在のエスニシティ概念へと転換されていったのである。客家と呼ばれる人々が生み出されるメカニズムは，空間の権力作用と切り離して考えることはできない。

このようにして見ると，なぜ言語・文化・アイデンティティのうえでまばらであった交界区の住民が同じ客家というカテゴリーで括られているかという，冒頭で示した疑問が理解できるであろう。すなわち，客家というエスニシティは，空間を生産する資源として，空間の特色をつくるために考案された概念であり，同質的な特性から自然発生的に現れてきた概念ではない。客家は，むしろ空間的特色をつくりあげる作用により，つまりアンリ・ルフェーブル（Lefebvre 1974）の言う「空間の生産」の産物として，再構築された存在なのである。したがって，客家は現在，エスニシティ概念であると同時に，空間概念ともなっているのである。

付　　記

本稿は，2012 年 3 月末に中山大学（中国広東省）で開催された国際シンポジウム「東アジア人類学論壇」で発表した原稿に大幅な修正を加えたものである。東洋文庫の末成道男先生，およびコロンビア大学のマイロン・コーエン先生にいただいたコメントは，本稿を加筆・修正するうえで大いに参考になった。また，国学院大学の渡邊欣雄先生，東北大学の瀬川昌久先生，神奈川大学の蔡文高先生，広島市立大学の飯島典子先生，嘉応大学の夏遠鳴先生より受けた示唆，および意見交換は，本稿の着想のうえでも大変刺激になった。さらに，改稿にあたっては，匿名査読者から貴重なご意見を賜った。この場を借りてお礼を申し上げたい。

注

1）　中原とは，古代中国王朝の所在地であり，現在の河南省とその近郊一帯を指す。ただし，中原の具体的な範囲については論者によって一致しておらず，場合によっては華北地方を広く指すことがある。ここでは，中原を，客家の思い描く想像上の北方地域と規定したい。
2）　筆者は，2008 年 3 月から 2010 年 1 月まで嘉応大学客家研究所に勤務し，広東省梅州市で暮らした。2008 年以降，筆者は，交界区だけでなく，広東省，広西省，四川省，香港，台湾，シンガポール，マレーシアの客家地域においても，広域のフィールドワークをおこなった。また，比較の対象として，広東省の潮汕地区でも調査を行った。
3）　興寧は，現在は県レベルの市である。ただし，県レベルの市は歴史的には県としての歴史が長いことが多い。したがって，本稿では便宜上，県レベルの市も，県として表記することにする。
4）　8 世紀より福建省西部の汀江流域につくられた行政単位。その地理的範囲は歴史的に差異があるが，長汀を中心とし，おおよそ北は寧化，清流，南は上杭，武平までの範囲を管轄していた。
5）『客家人与客家文化』によると，江西省は，赣南の他，西北部の宜春市に位置する銅鼓が「純粋」な客家県である。また，銅鼓の周辺にある，修水，万載，宜豊といった諸県にも客家が一部居住しているという（丘恒興 2011: 4）。
6）　東亜同文書院の学生は，處州（今の浙江省麗水）における「客家」について，婦人が重労働を担う点，歌を好む点を描き出している。だが，この「客家」の説明には同時に，「畜客」「盤瓠」「藍，盆，雷，鐘」などの文字が書かれており，彼らが現地での呼び名に従い，ショオ族のことを「客家」と記載していることが分かる（東亜同文書院 1912: 305）。また，麗水は，現在でもショオ族の居住地として知られている。
7）　例えば，ダイヤー・ボールは，他の宣教師と同じく，客家が中原にルーツをもつ漢族であることを前提としている。
8）　例えば，粤東方言と近似性の高い東江流域一帯（龍川，和平，紫金，連平，河源，恵州）は客家の多い居住区と書かれている。ただし，この本を詳細に検討していくと，広東省内部でも現在の「常識」と異なる点がある差異があることが分かる。いくつか例を挙げると，潮汕地区の一部（饒平，普寧，恵来，海豊，陸豊）は「純粋」な客家地区，湛江地区（海康，遂溪，徐聞，呉川など）は客家の相当多い地区と記録されている（在広東総領事館編 1932: 9–10）。
9）　乾隆，嘉慶年間の『汀州府志』，および天啓（明），乾隆，嘉慶，同治年間の『赣州府志』では，客家の記載がみられない。それに対し，粤東の『嘉応州志』では 1898 年に客家の記載が現れ，1930 年代までには，教科書，族譜，政府の出版刊行物などで「客族」など客家に関連する文字が現れるようになった（夏遠鳴 2012: 53–60）。
10）　なお，寧化の石壁村を客家のルーツとする見解は，19 世紀末に宣教師ピトンがすでに提示している。
11）　もっとも，この本では，福建省，江西省にも「客族」はいると書かれているが，同時に，

浙江省，貴州省や雲南省にも分布していると書かれている（何吟 1956: 1）。ダイヤー・ボールの記録と同じく，インドネシアの華人もまた，客家の中心地を粤東に設定する一方で，客家の居住範囲を今日的な「常識」より広範に描き出していることが分かるであろう。

12） 1982 年，国立民族学博物館の周達生教授は「客家文化考」（1982）という論文を上梓したが，氏が研究の対象にしたのは梅州市と龍岩市だけであった。また，呉福文は，1990 年の論文において，閩西，贛南の研究が客家研究の枠組みから外れてきたことを嘆いていた（呉福文 1990: 37）。

13） 世界客家大会とは，数年に 1 度，世界の客家が一堂に会して経済，学術，芸術などの交流をするイベントである。1971 年に香港で第 1 回大会が開催されてから，ほぼ 2 年に 1 度のペースで，台湾，タイ，シンガポール，日本，アメリカなどで開催されてきた。最近は，中国における地域開発の手段として使われる傾向にあり，中国各地を中心として毎年のように開催されている。

14） 2010 年 1 月，朝日新聞の外岡秀俊からのインタビューに対し，嘉応大学客家研究所を早期から支えてきた房学嘉は，「私はもともと高校の数学教師であった。後に縁があって嘉応大学で同窓生を接待する仕事に就いた。その時，華僑たちが，『なぜ客家の研究をしないのか』『客家の研究はこれから役に立つ』と薦めてきた。私は当時あまり客家とは何であるのか意識していなかったが，彼らが薦めるので客家の研究を始めたのだ」と語ったことがある。

15） アンリ・ルフェーブルは，空間の研究史を整理し，空間の概念を「空間の実践」「表象の空間」「空間の表象」に分類した（Lefebvre 1974）。すなわち，「空間の実践」とは日常会話でもよく使われる物理空間であり，「表象の空間」とは，デュルケーム以降の人類学が頻繁に用いてきた均質的な社会関係や価値観により形成される集合的な領域，すなわち社会空間を指す。他方，「空間の表象」とは，境界づけられ，イデオロギー的な意味を付与することで生産される管理の領域，すなわちフーコー的な政治空間を指す。本稿で採用している空間概念は言うまでもなく「空間の表象」のそれである。なお，アメリカの人類学者であるセサ・ロウは，ミシェル・ド・セルトーやピエール・ブルデューの実践論を援用し，身体行為により「空間の表象」を「表象の空間」に転換していくプロセスを「空間化」（spatializing）と規定した（Low 1999: 111–112）。しかし，近年の人類学では「表象の空間」に相当するものとして「場所」（place）の概念を使うことが多いので，本稿では，ロウのいう現象を「場所化」とし，むしろ「空間の表象」を仕立てあげていく権力的なプロセスの方を「空間化」と定義した。

16） 21 世紀初頭にアモイ大学で修士・博士課程を学んできた玉林師範大学の陳碧によると，彼女の永定出身の友人は，1990 年代になるまで，自身が客家であることを知らなかったのだという。陳碧は，いつ頃から客家としての身分に気づいたのか閩西出身の友人たちに聞いて回ったが，彼らは決まって肩をすくめ「最近だよ」と答えたのだという。

17） だが，特に連城は，他の閩西諸県とは意思疎通ができないほど異なった客家語を操り，羅香林ですら客家が約 30 パーセントしかいないと県であるとみなした地区であった。連城出身でアモイ大学人類学部の教授である鄧暁華氏は，2012 年 11 月 3 ～ 5 日に国立民族学博物館で開かれた国際シンポジウムの席上で，「1990 年代に入るまで連城の人々には客家としての自己認識がなかった」と発言した。

18） 江西省社会科学院客家研究問題プロジェクト・チームは，贛州市の 710 万人の人口のうち実に 680 万人が客家であり，贛州市区と一部の県城を除くほぼ全ての地区が客家で占められると主張している（江西省社会科学院客家研究問題課題組 1995: 77）。

19） 東京都立大学（当時）の渡邊欣雄先生，および神奈川大学の蔡文高先生との共同調査による。

20） 江西投資招商網（http://www.jxinvest.gov.cn/tzxw/20041120110506.asp），2004 年 11 月 20 日掲載より。

21） 代表的な建築物として，囲屋がある。特に龍南の関西囲屋は，第 19 回世界客家大会でも訪問地となっており，贛南南部の主要な観光地となっている。

22） 興国では，三寮村を「風水第一村」としてリゾート開発しているが，ここも客家と結び付けられている。三寮村の住民だけでなく，ここで風水を広めたとする江西学派の始祖・楊筠松も客家とみなされているが，当時に客家意識があったわけではない。彼らを客家とみなす根拠は，ここを客家空間とするア・プリオリな前提である（河合 2007: 88）。

23） 粤東方言，特に梅県方言を標準的な客家語とする基準の設定も，恣意的である。ここが客

家語の中心地とされる理由の 1 つは，多くの客家華僑が梅県から海外に出ていると歴史的な背景が関係していると言われる（瀬川 2003: 126–127）。この説は，梅県方言のなかでも，華僑を輩出する港口となった松口鎮のそれが最も「正統」な客家語であると現地でみなされている事実とも，整合的である。だが，世界のすべての華僑社会で，梅県の客家語が標準的であると思われているわけではない。例えば，マレーシアのサバ州は，華人のなかで客家が過半数を占めており，あらゆる華人が客家語を解すと言われるが，サバ州で「標準」とされている客家語は，新安・宝安（今の香港新界，深圳一帯）方言である。これは，サバ州で梅県出身者が少ないことに加え，広東省からサバ州への移民を仲介したバーゼル教会が香港を中心に宣教しており，また，バーゼル教会が新安・宝安方言を客家語として宣教した歴史とも関係している。この事例からも，何を標準的な客家語とみなすかは，背後の社会的条件に左右されることを垣間見ることができる。ちなみに，筆者が，2012 年 8 月にサバ州でフィールドワークをおこなった際，梅県と同じ粤東の大埔出身者は，華人が主に知る「標準」客家語と違うことから，客家ではないというレッテルを外部から貼られる傾向にあった。現地の研究者および大埔出身者本人は，大埔の言語を客家語であると考えているが，その一因には，大埔が客家空間に属しているという前提もあった。

24）　科挙合格者を示す石柱であり，通常，祖先が科挙に合格したら 1 本ずつ立てると言われる。この石柱が多ければ多いほど，歴史と権威のある一族であるという証拠になる。

25）　近年の客家地区では，交界区が客家空間として生産されているだけでなく，交界区とつながりのある地区もまた，客家空間として生産されるようになっている。例えば，四川省成都市の郊外にある東山一帯には，交界区より移民した人々が居住しているが，彼らは 1980 年代になるまで客家としての意識はなく，「広東人」と自称していた。彼らは，周囲の漢族からも「土広東人」などと称され，外的にも客家であるとはみなされてこなかった。だが，近年，彼らは交界区の出身であるというだけで客家とみなすようになり，また東山を客家空間と規定して街づくりや観光化が進められるようになっている。こうした空間化の現象については，稿を改めて論じることにしたい。

26）　なお，空間の特色を醸し出し，生産 - 消費行為の循環をつくりだす資源とされてきたのは，客家にとどまらない。例えば，広州市の下町である西関においても，広府人及びその文化（広府文化）が空間の特色を出す資源として使われ，それを特色ある景観として生産することで，観光客や投資者を招く戦略が採用されてきた（河合 2009, Kawai 2012）。そのなかで，もともと回族の食品であったとされる牛雑が，西関という空間に属しているだけで広府文化として宣伝されるなど，ここでも空間化の現象がおこっている。ただし，中国華南地方を全体的に見渡すと，ある特定のエスニシティ及びその文化的特色を空間戦略として用いる程度には，地域的な偏差がみられる。一例を挙げると，広東省沿岸部の汕尾市では，他者から見て特色ある水上生活者とその文化を利用し，収益を得ようという試みがある。しかし，現在のところ，この空間戦略は観光収入には結びついてはいないし，汕尾市という空間が水上生活者というエスニシティに結び付けられてもいない（稲澤 2010）。本稿は，客家を事例とし，エスニシティと空間の一致について議論を展開したが，今後は，両者が一致しないメカニズムへの考察もさらに必要となるであろう。

参考文献

〈日本語文献〉

飯島典子
　2007　『近代客家社会の形成――「他称」と「自称」のはざまで』東京：風響社。
稲澤　努
　2010　「消される差異，生み出される差異――広東省汕尾の『漁民』文化のポリティクス」『海港都市研究』5: 3–22。
夏遠鳴
　2012　「客都の変遷――清末以降の梅州における客家意識の形成と客家文化の創生」（河合洋

尚訳）瀬川昌久・飯島典子（共編）『客家文化の創出と再創出――歴史と空間からの総合的再検討』pp. 51–76，東京：風響社。
河合洋尚
2007「客家風水の表象と実践知――広東省梅州市における囲龍屋の事例から」『社会人類学年報』33: 65–94。
2009『相律する景観――中国広州市の都市景観再生をめぐる人類学的研究』（博士学位論文，東京都立大学）。
2012「東江客家文化の創出と景観建設――広東省河源市を事例として」瀬川昌久・飯島典子（共編）『客家文化の創出と再創出――歴史と空間から総合的再検討』pp. 135–166，東京：風響社。
蔡文高
2012「福建省西部における祖先祭祀の復興と客家――長汀汀州鎮劉氏家廟の事例から」瀬川昌久・飯島典子（共編）『客家文化の創出と再創出――歴史と空間から総合的再検討』pp. 217–224，東京：風響社。
蔡驎
2005『汀江流域の地域文化と客家――漢族の多様性と一体性に関する一考察』東京：風響社。
在広東帝国総領事館（編）
1932『広東客家民族の研究』外務省情報部。
周達生
1982「客家文化考――衣・食・住・山歌を中心に」『国立民族学博物館研究報告』7(1): 58–138。
周建新・柴可
2012「贛南地区における客家文化の構築過程」（横田浩一訳）瀬川昌久・飯島典子（共編）『客家文化の創出と再創出――歴史と空間から総合的再検討』pp. 77–102，東京：風響社。
瀬川昌久
1993『客家――華南漢族のエスニシティとその境界』東京：風響社。
2003「客家語と客家のエスニック・バウンダリーについての再考」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態――中国周縁地域の歴史と現在』pp. 107–133，東京：風響社。
高木桂蔵
1991『客家――中国の内なる異邦人』東京：講談社（講談社現代新書）。
田上智宜
2007「客人から客家へ――エスニック・アイデンティティーの形成と変容」『日本台湾学会報』9: 155–176。
東亜同文書院第 9 期生
1912『孤帆双蹄』上海：東亜同文書院。
中川学
1980『客家論の現代的構図』東京：アジア政経学会。
根津清
1994『客家――最強の華僑集団』東京：ダイヤモンド社。
彭阿木
1930a「客家の研究」『支那研究』21: 77–183。
1930b「客家の研究（続）」『支那研究』23: 113–217。
山口県造
1930「客家と支那革命」『東洋』33 巻 10 号（国会図書館所蔵マイクロフィルム）。

〈中国語文献〉

安煥然
2009「馬来西亜柔佛客家人的移植形態及其認同意識」庄英章・簡美玲（編）『客家的形成与変遷（下冊）』pp. 887–910，新竹：国立交通大学出版社。
陳運棟
1983『客家人』台北：聯亜出版社（原版：1978 年）。

陳支平
1997 『客家源流新論』南寧：広西教育出版社。
程美宝
2006 『地域文化与国家認同――晩清以来「広東文化」観的形成』北京：生活・読書・新知三聯書店。
房学嘉
1994 「試論客家共同体的初歩形成期」『客家研究輯刊』4: 1–31。
2009 「『客家古邑・万緑河源』的歴史人類学考察」『客家研究輯刊』35: 166–177。
何　吟
1956 『客族文献砕金』台北：耶加達天声日報社。
河合洋尚
2010 「客家文化重考――全球時代下空間和景観的社会生産」『贛南師範学院学報』31(2): 3–9。
2011 「二戦前日本的客家民族理解研究」『広東民族学会研討会論文集』pp. 1–14，梅州：嘉応学院。
黄志繁
2007 「誰是客家人？」『中国図書評論』3: 56–59。
江西省社会科学院客家問題研究課題組
1995 「江西客家概述」『江西社会科学』99: 66–124。
劉紹鑫
1996 「江西客家方言中的客籍話和本地話」『南昌大学学報（社会科学版）』27(4): 97–103。
劉鎮発
2001 『「客家」――誤解的歴史，歴史的誤解』学術研究叢書。
羅香林
1992 『客家研究導論』上海：上海文芸出版社（原版 1933 年）。
梅州市華僑志編輯委員会
2001 『梅州市華僑志』深圳：星光印刷有限公司。
胡希張・莫日芬・董励・張維耿（編）
1997 『客家風華』広州：広東人民出版社。
彭兆栄
2006 『辺際族群――遠離帝国庇護的客人』合肥：黄山書社。
2008 「帝国辺陲政治地理学対客家文化的影響――以福建寧化客家族群建構為例」『客家研究輯刊』33: 1–9。
丘恒興
2011 『客家人与客家文化』北京：中国国際広播出版社。
譚元亨
2005 『梅州世界客都論』広州：華南理工大学出版社。
呉福文
1990 「閩西客家文化事象挙探」呉澤（編）『客家学研究』2: 37–46。
1994 「客家称謂之由来」謝剣・鄭赤琰（編）『国際客家学会論文集』pp. 25–30，香港：香港中文大学香港亜太研究所海外華人研究社出版。
呉慧娟
2008 「独立前新加坡南洋客属総会的作用」『新加坡客家文化与社群』pp. 93–131，新加坡：新加坡国立大学中文系。
肖偉良
2003 「打造客家品牌，発展文化産業」古小平・肖偉良（編）『「文化梅州」発展戦略研討会論文集』pp. 43–53。
小林宏至
2009 「再次考慮『福建土楼』的学術表象――関於『福建土楼』和『祠堂』的学説分析」『国際人類学与民族学連合会第 16 届世界大会論文集（下冊）』梅州：嘉応学院。
万建中
2009 「客家族群制造的神話叙事」羅勇（編）『客家学刊』創刊号，pp. 104–111。
周建新（編）
2007 『江西客家』桂林：広西師範大学出版社。

〈英仏語文献〉

Baudrillard, J.
1981 *Simulacres et Simulation*. Paris: Editions Galilée.
Constable, N.
1996 Introduction: What Does It Mean to be Hakka?. In N. Constable (ed.) *Guest People: Hakka Identity in China and Abroad*. Seattle and London: University of Washington Press, pp. 3–35.
Dyer-Ball, J.
1893 *Things Chinese: Being Notes on Various Subjects Connected with China*. Second Edition, London: Sampson Low, Marson.
Erbaugh, M. S.
1996 The Hakka Paradox in the People's Republic in China: Exile, Eminence, and Public Science. In N. Constable (ed.) *Guest People: Hakka Identity in China and Abroad*, pp. 196–231. Seattle and London: University of Washington Press.
Harrell, S.
1995 The History of the History of the Yi", In S. Harrell (ed.) *Cultural Encounters on China's Ethnic Frontiers*. Seattle and London: University of Washington Press, pp. 63–91.
Harvey, D.
1990 *The Condition of Postmodernity: an Enquiry into the Origins of Cultual Cange*. Oxford: Blackwell.
Kawai, H.
2011 The Making of the Hakka Culture: The Social Production of Space and Landscape in the Global Era, *Asian Culture* (Singapore Society of Asian Studies) 35: 39–56.
2012 Creating Multiculturalism among the Han Chinese: Manufacturing of Cultural Landscape in Urban Guangzhou. *Asia Pacific World*, (New York and London, International Association for Asia Pacific Studies) 3(1): 39–56.
Lefebvre, H.
1974 *La production de l'espace*. Paris: Anthropos.
Leong, S. T.
1997 *Migration and Ethnicity in Chinese History: Hakkas, Pengmin, and Their Neighbors*. Stanford University Press.
Low, Setha M.
1999 Spatializing Culture: The Social Production and Social Construction of Public Space in Costa Rica. In S. M. Low (ed.) *Theorizing the City: The New Urban Anthropology Reader*, pp. 111–137. New Brunswick, New Jersey, and London: Rutgers University Press.
Martin, H. J.
1996 The Hakka Ethnic Movement in Taiwan, 1986–1991: In N. Constable (ed.) *Guest People: Hakka Identity in China and Abroad*, pp. 176–195. Seattle and London: University of Washington Press.
Rey, C.
1937 *Conversations Chinoises*. Missionnaire à Swatow.
Vogel, E. F.
1989 *One Step Ahead in China: Guangdong under Reform.* Cambridge, Mass: Harvard University Press.

インターネット

梅州市政府
http://www.meizhou.gov.cn/　（2011 年 12 月 29 日アクセス）

龍岩市政府
http://www.longyan.gov.cn/　（2011 年 12 月 29 日アクセス）

三明市政府
http://www.ganzhou.gov.cn/　（2011 年 12 月 29 日アクセス）

清流県政府
http://www.fjql.gov.cn/main/　（2011 年 12 月 30 日アクセス）

明渓県政府
http://www.fjmx.gov.cn/main/indexdynamic.asp　（2011 年 12 月 30 日アクセス）